

Title	佃島の文化：記述的芸術社会学資料探訪
Sub Title	Tsukudajima and its Culture : An inquiry into materials for Descriptive Sociology of Art
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.52 (1968. 3) ,p.1- 46
JaLC DOI	
Abstract	Various kinds of small unique communities existed in Tokyo till the end of the World War II. They were unique because the inhabitants of these communities had a consciousness of kind, special traditions and dialects of their own which were different from those of surrounding societies. They were also small as the land occupied by the inhabitants had comparatively narrow boundaries, and moreover, the population in them did not increase beyond a certain limit. Such communities in Tokyo had seen better days and had clearly shown their uniqueness in both Edo and Meiji eras. But almost all of these small unique communities in this large city were disorganized, one after another, before and after the World War II except Tsukudajima (once a fishing village in a small island at the mouth of the River Sumida) in which some characteristic qualities still remain. The uniqueness of Tsukudajima, however, is now being gradually lost and the differences between this community and other parts of Tokyo is disappearing under the influence of the remarkable social fluctuation and industrialization in Japan, especially after the World War II. Thus I intended to inspect and make clear the factors causing the spiritual and material changes of this community. For this purpose, I have tried in these papers to describe traditional characteristics of Tsukudajima, inquiring into the seven selected items listed below. (1) Shirauo (white bait) and literature (2) Prince Takahito Arisugawa (3) Senryu (witty epigrammatic poem) (4) Pictures (5) Architecture of Sumiyoshi-Shrine (6) Carvings (7) Folklore (a) Festivals (b) Dialects (c) The New Year's Day (d) Bon-odori (folk dance).
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000052-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佃 島 の 文 化

(記述的芸術社会学資料探訪)

Tsukudajima and its Culture

(An inquiry into materials for Descriptive Sociology of Art)

佐 原 六 郎

Rokuro Sahara

Résumé

Various kinds of small unique communities existed in Tokyo till the end of the World War II. They were unique because the inhabitants of these communities had a consciousness of kind, special traditions and dialects of their own which were different from those of surrounding societies. They were also small as the land occupied by the inhabitants had comparatively narrow boundaries, and moreover, the population in them did not increase beyond a certain limit. Such communities in Tokyo had seen better days and had clearly shown their uniqueness in both Edo and Meiji eras. But almost all of these small unique communities in this large city were disorganized, one after another, before and after the World War II except Tsukudajima (once a fishing village in a small island at the mouth of the River Sumida) in which some characteristic qualities still remain. The uniqueness of Tsukudajima, however, is now being gradually lost and the differences between this community and other parts of Tokyo is disappearing under the influence of the remarkable social fluctuation and industrialization in Japan, especially after the World War II. Thus I intended to inspect and make clear the

factors causing the spiritual and material changes of this community. For this purpose, I have tried in these papers to describe traditional characteristics of Tsukudajima, inquiring into the seven selected items listed below.

(1) Shirauo (white bait) and literature (2) Prince Takahito Arisugawa (3) Senryu (witty epigrammatic poem) (4) Pictures (5) Architecture of Sumiyoshi-Shrine (6) Carvings (7) Folklore (a) Festivals (b) Dialects (c) The New Year's Day (d) Bon-odori (folk dance).

ま え が き

第二次世界大戦終了の頃まで、東京にはまだ諸種の特殊小地域社会がいくらか残存していた。ここで特殊というのは、それらの社会の住民が一種の同類意識によって結ばれ、周囲の諸社会とは違った古い伝統、慣習、方言などを共有すること、また小社会というのは大都市のなかに在りながら、それらの住民の占める地域が比較的狭く区割され、しかもその人口がある限度を越えて増加しがたいことによって特徴づけられる社会を意味する。このような社会は江戸から明治の時代にはもちろん、その後になってもかなり多く存在して、それぞれ特殊性を発揮していた。けれども、かつて、同質者間の緊密な結合のもとに協働的活動を続けていた東京の特殊的小地域社会も、第二次大戦を契機として、それを囲繞する大都市社会の中に拡散して、その地域的区割が除去され、文化的特殊性を失い、それ自体としては解体のやむなきに至った。けれどもそうした解体をもたらす著しい社会的、政治的変動の波をかぶりながら、佃島だけは多少とも従来の地理的特徴と住民の同質性を保持して、独特の情趣や風物の名残りをとどめている。このような事実に向けて私は数年前から、今では珍しい大都市内特殊小地域社会としての佃島の動態を見守り、その過去と現在、更にそれがいかに変化しつつあるかを調査究明することに努めている。しかし

本稿では別記目次に示した諸項目を選び、それらについて探訪した結果を、できるだけ現実に即して考察し、以て佃島の特徴の少くとも一部を記述することにした。なお私のいわゆる記述的芸術社会学に関する理論上の論考は他の機会にゆずり、ここではそれに立ち入らない。

(1) 白魚と文学

古くから白魚といえはすぐ佃島を連想したほどこの二つは切り離せない関係にあった。それ故佃島を詠み、白魚を歌った和歌、俳諧、川柳の類は甚だ多い。明治天皇の御製にも次の数首がある。

佃島ゆうだちはれて入海の

波間すずしく照す月かな

(明治 32)

佃島さやかになりぬ芝浦の

波のうきぎり晴れわたるらん

(明治 37)

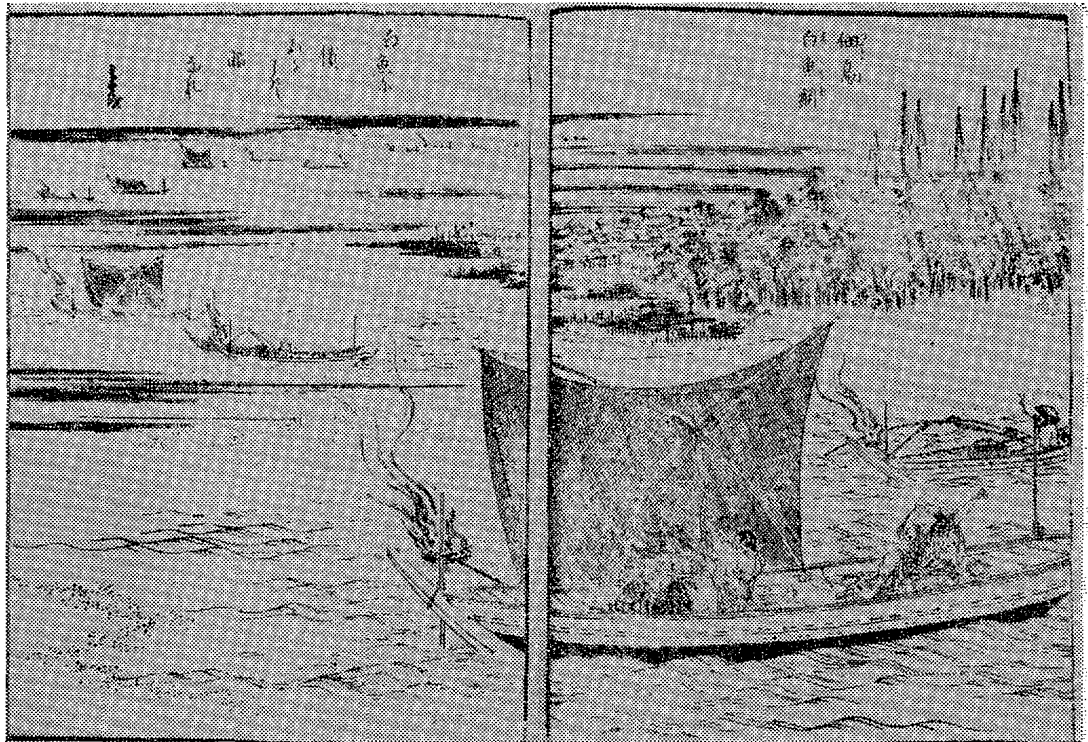
佃島白魚とらむほす網に

ふりかかるなりけさの雪かな

(明治 39)

佃島の漁師が旧幕の古い時代から年々の寒い季節、将軍家に白魚を献じていたのは周知の事実である。けれども皇室に対しての献上がいつ、どのようにして行われたかについて私は次の文書以外に、依るべき資料を見るに至っていない。その文書は佃島住吉神社第九代神主平岡好国のしたためた有栖川一品宮御用留記(自明治12年2月至同17年9月)の中にある下記の日記である。

明治15年2月9日、北風、本日午前10時、一品宮へ参殿、白魚、簞に入献上致し候事、但二簞は朝廷皇后宮へ一品宮より献上被成候事、此時御所宮より御使出候、此時参殿致し候人名、平岡好国、水谷謹、国泉鉄五郎、伊藤三太郎、高橋清太郎、小沢弥右衛門、右の者へ御茶、御菓子頂戴被仰付候事、誠に右の手續に相成候事は全く岩下万平殿の手引によりて献上も相叶難有事に候、猶末々の者もこの事を相^{わきま}弁江岩下殿の御厚報忘るべから



白魚網と芭蕉の句

ず、右大慶の余りに其道にて、「百舟のつくだの海士がすなとりしうおも雲居にのぼる御代かな」と詠じて川柳のもとにつかわしけるととき、かえしに「白魚の身にひれのつく今日の賀儀」、同日宮へ拝謁被仰付難有事に候、この節岩下殿、御家扶中川長生殿、池田光政殿へ白魚進上致し候事。

この記事中に川柳とあるのは当時佃島在住の六世川柳水谷金蔵である。私はこの記事を見て明治15年2月9日こそは皇后宮へ白魚献上の行われた最初だと推定したが、その後入手した⁽²⁾佃島年表には明治14年1月に「佃島、旧幕時代の白魚献上を復活、宮内省へ白魚献上のことはじまる」とあるから、あるいは私の推定より一年余り早く行われていたのかも知れない。その後宮中への献上は度々続けられ、その都度宮内省から受領の手紙が届いていた。今その一例として、現に住吉神社々務所二階に掛けてある額縁入りの受領書の文面を示してみよう。「一、白魚 三箱 天皇、皇后両陛下へ献上被致候ニ付、御前ニ差上候、此段申進候、大正十五年三月一日、

宮内大臣一木徳郎、佃島漁業組合長 金子政吉殿」。

佃島の白魚に関する古文書その他の文献はかなり多い。今は見えないが、数年前までは平岡好国書の佃島白魚沿革記を額におさめて社務所の二階に掛けてあった。また文献としてよい参考となるのは中央区史上巻と羽原又吉著 日本漁業経済史 中巻の二に記述されたものであろう。けれども佃島の文化を語るという意味では岡本綺堂の随筆「⁽³⁾白魚物語」が一番面白い。伝説と史実とを折り込んで巧みに描いた綺堂の白魚物語を読めば佃島、白魚、篝火の三題話的連関がわかり、多くの文人墨客の残した数々の和歌、俳諧、絵画その他の作品も一層面白く鑑賞することができる。特に⁽⁴⁾江戸名所図会の「佃島白魚網の図」と、そこに添え書きされた芭蕉の「白魚に価あるこそ恨なれ」の句の如きはまことに印象深く佃島附近の往時をまざまざと偲ばせる。

(2) 有栖川宮熈仁親王と佃島

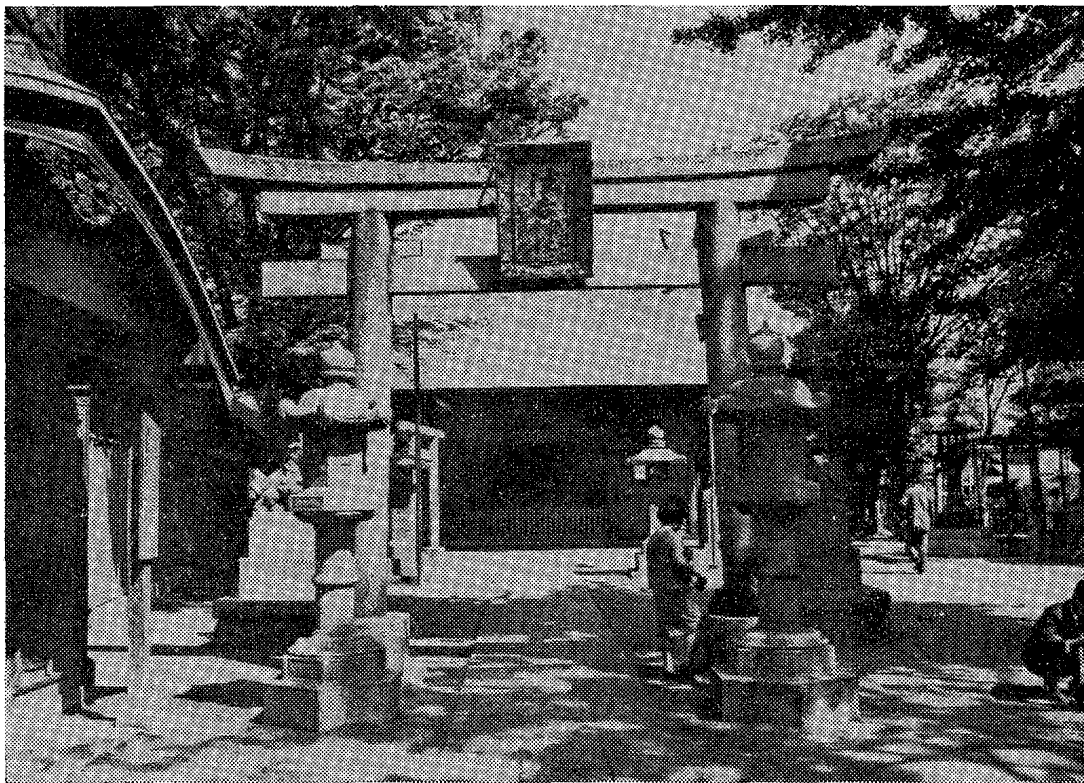
隅田の川端から正面通路を進み、住吉神社の表門に近づいて、まず第一に注目されるのは御影石造春日鳥居の額束をふさぐ大きな陶器額面である。それには「住吉神社」とコバルト色に焼きつけされた一品熈仁親王御染筆の神号があざやかに読まれる。これと同じ神号の御直筆は「住吉神社」と「明治十五壬午歳六月三十日 一品熈仁親王」との二幅の立派な軸物に表装されて社務所二階の床の間を飾っている。佃の人々のうちには熈仁^{たかひと}を熈^{ひと}仁ととり違えて熈をタルと読んでいる者もあるが、試みに有栖川第九代の⁽⁵⁾「熈仁親王日記」の第四巻によって明治15年の各項を調べると、どこにも佃島又は住吉神社のことは書いてなく、しかも同親王は6月18日に横浜で御乗船、ヨーロッパへの旅に出ておられる。これに反して第八代の熈仁親王⁽⁶⁾については「熈仁親王行実」第12章に明治15年5月28日「午前九時御出門、岩下副総裁、藤井御附を随えて佃島に赴き、住吉神社に^{さい}賽し、祠官平岡好国の家に休憩の後、船を隅田川の中流に浮べて漁魚を覧給ふ」とあ

り、また同書の第14章には「明治五年、東京御移徙後は、⁽⁷⁾入門の者極めて稀なるも、これに引替へ、御染筆を請ふもの甚だ多く、老来頗る煩勞を覚え給ふにも拘らず、快く諾^{うけが}はせ給へり。特に神号社額の揮毫の多きは、神道興隆に資する思召に出でたるものの如く……」とあるから、佃島住吉神社の神号御染筆も、そうした思召によるものであることがわかる。当時の親王は71才であられたが、それより以前にも神号額字の御染筆多く、明治4年8月の近江国山田神社の神号をはじめその実例は今でも少なからず遺存している。また特に明治9年12月5日、滋賀県長浜町鎮座の八幡神社に下賜された額字「八幡神社」の神号と「一品幟仁親王」の御署名とはその文字の運筆、書体、品格が佃島住吉神社のものと全く同じで、何れも一目瞭然、同親王の御書であることがわかる。

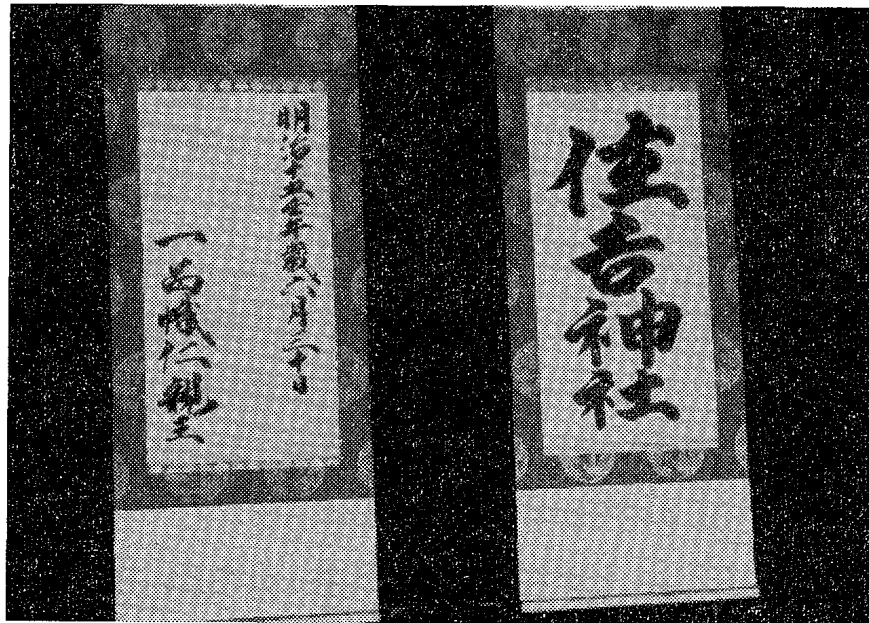
前記有栖川一品宮御用留記の明治15年5月28日の記録には次の事項がしるしてある。「今朝九時御出門にて一品宮漁業御遊覧として御成有之、御馬車向川岸迄、家根舟を以て御迎に出候、御舟佃島に着、当神社へ参被遊候、此時御供は岩下万平、山本邦保、池田光政、家丁一名、御小休に御立寄被遊候事」と。この記事を幟仁親王行実第12章の前掲引用文と照合して読むならば、親王の佃御訪島、御参拝、御小憩などの事実が一層確実なこととして認められる。他方住吉神社神号御染筆については一品宮御用留記の次の二つの記事が注目される。その一つは「当社陶器額神号」と題して明治15年6月12日に「一品宮へ御染筆願出候処、御聞届に相成、七月二日に御使にて被仰下候に付、四日参殿致し候処、御染筆拝領いたし候、此節陶器問屋島田宗兵衛より、外に願出候処、右も御出来仕下げ相成候事」と書いたものである。また他の一つには次のようにしるされている。「一品親王御染筆下附願、乍畏以書奉願上候、私儀年来住吉神社ヲ朝夕信心仕居候処、今般、家ノ祭神仕度候ニ付而者末代子孫ノ光輝ニモ相成候間、恐懼ヲ不省右神号御染筆被成下置度、此段奉願上候也。明治十五年十月、日本橋区作内町、平民、富永吉右衛門、佃島住吉神社祠官 平岡好国 一品宮

御家扶御中」

なおこの二つの記録とは別に次の手紙が平岡家に保存されている。それは奉書紙の巻紙に認めたものである。「記、一、額面 住吉神社 一品親王御染筆授与候也 明治十五年七月 有栖川宮附 内閣小書記官 藤井璞印」。以上諸種の文面を見ても明らかなように、この時の神号御染筆は、仮りに富永吉右衛門なる者が平岡好国との連名で願出た分も御下附になったとすたば、住吉神社（平岡好国）と陶器問屋（島田宗兵衛）とに下されたものと合せて三つあったはずである。そして現に社務所二階床間にかけてある神号と、鳥居の陶器額面に焼きつけられたものとは、共に7月4日、好国らが参殿拝受したと記録された御染筆に相違ないと思う。また第十一代神主の平岡好道の話によると、大阪堺の住吉神社鳥居にも、同じ陶器額面が掛けてあり、その他のものと合せて13個ほどの陶器額面が同時に製作されたはずだとのことである。



住吉神社正面と陶器製神号額



熾 仁 親 王 書 神 号

有栖川宮第一代の好仁親王は後陽成天皇の第七皇子であり，第八代の熾仁親王（1813-1886）は光格天皇の御猶子，また同親王の御世嗣第九代の熾仁親王（1836-1825）は仁孝天皇の御猶子であった．熾仁親王は有栖川宮総記及び熾仁親王行実⁽⁹⁾によると，明治元年正月新政に当り神祇事務総督に任ぜられ，次いで神祇事務局督を兼ね，議定職に補されたが幾もなく辞職し，明治4年御引退後は優遊自適の境地にあられた．しかし14年神道教導総裁，15年更に御親祭御用掛を拝受し，また皇典講究所総裁たるべしとの聖旨を拝された．19年1月24日75才にて薨去．親王は明治14年12月1日，特に参内して明治天皇に謁し，奏書を奉り，かつ神道の精神につき燃ゆるが如き御信念を披瀝された．この奏書の全文は熾仁親王行実のうちに見られるが「御先祖タル伊勢神宮ハ勿論，ソノ他ノ神社モ古来御崇敬被遊候事ハ，御孝道中ノ最モ大ナルモノニ被為在候，右御孝道被為欠候節ハ，御歴代ノ御威霊モ如何ト，深ク奉恐入候」という一節には明治天皇も深く感銘あられたことと思う．親王は国体を維持し，時弊を矯正するには敬神の外，他に道のないことを天聴に達せられたと共に，御自らも敬神の実をあげ，

東京だけでも日枝神社、芝神明宮、神田明神などに報賽せられ、また侍女に命じて水天宮、氷川、豊川、湯島などの諸神社にも月参せしめられたという。

維新前、親王家にあっては、多くは元服の礼の行われた後、叙位任官の御沙汰を拝するのが慣例であった。品というのは官位の上下を分つための称号で、熈仁親王は12才（文政6）に御元服、同時に三品に叙せられ、36才（弘化4）で二品、56才（慶応3）で一品に陞叙せられた。京都から東京への御移転のあったのは明治5年、61才のときであられた。親王は9才のとき、父宮^{つなひと}韶仁親王について和歌を学び、後に斯道の蘊奥をきわめて明治天皇の和歌御師範を仰付けられた。また書道に於ても宮家歴代の親王と同様に、いわゆる有栖川流の達人で、一品陞叙も筆道師範多年励勤と、天皇が嘉せられた聖旨に基くものであった。笑山（冬山は睡るが如く、春山は笑うが如しという古語に基く）、樗風、鷺目は書に於ける同親王の雅号である。

平岡家にはなお熈仁親王の色紙二枚と中啓（親骨の上端を外にそらし、たたんでも半開きのままの状態をなす扇子）とがある。色紙には「松、詣き
てみるにおよばぬ住の江のなにしおひたる松のむらたち。一品熈仁親王」
「松上鶯、鶯のしらぶる声もあひ生のまつ風ことに聞えあくらん。親王」と
詠ぜられた。次に長さ 32. 幅 13 cm の中啓は末広形の木箱におさめられた立派なもので、開くと表の絵は金地に唐の文人二名と、丸い硯をうやうやしく両手に捧げる童子一名とを池畔に立たせたもので、文人の一人は他の一人の書く形なき幻影の文字を斜め背後から眺めているという図である。またこの中啓の裏面の絵は草原を流れる小川の岸に松の灌木と、親子二匹の亀とを配した図である。表裏とも、その左右上端は丁子、笹、梅花、ぼたんなどの細い線画模様を点在させた紅色の縁となっている。またこの中啓を容れる木箱の蓋の裏には「是の御末広なん、かしこかれと、一品熈仁親王の御ほんすへりなり。佃島なる住吉神社の祠官平岡好国に賜りし故由

をかきつけてよと乞はるゝまゝ、やがてしるし侍るは明治十五年新はる、中川長生 印」としるされ、更にその下に小さく「末広の神の恵にあふきかな。亀嶺」と添え書がしてある。この箱書をした中川長生は当時有栖川宮家扶であった人で、この人から平岡好国に送られた宮家との関係書簡は今なお平岡家に十数本保存されている。

(3) 川柳と佃島

佃島に縁のある文芸のうちで一番庶民的で、興味深いのは川柳であろう。川柳は柄井八右衛門（1718-90）^{〔1〕}によって創始されたというが、五代目の緑亭川柳（1787-1858）は摂州佃村から下降した漁師の子孫で、本名を水谷金蔵と称し、生れは茅場町であったが、後佃島に住んでいた。また六世川柳（1814-82）は五世の長子で和風亭川柳と号し、幼名喜代松、後金蔵を襲名した。六世も佃島の住民で、明治14、15の両年には住吉神社の氏子総代となっていた。更に五世の流れをくんだ平岡平左衛門とその子孫も、同様に、佃の人である。

昭和41年11月22日には東都川柳長屋連主催、魚市場佃組合協賛、内外タイムス社後援で五世川柳碑建設式とその記念句会が開かれた。住吉神社境内に建立された五世川柳碑は高さ2m、横1m内外に凹凸する不規則な形の仙台石で、台座としては重さ2トンもある御影石を据え、総工費60万円であったという。中央区民新聞（昭和41.11.21）によると、そもそも句碑建設の話のモチあがったのは2年前からであり、その頃魚市場関係者80名で作っている佃組合（会長相原倉吉）の寄り合いに、川柳愛好者の中から、以前佃島出身の偉い川柳の大家がいたという話だが、その偉い人を調べてみたらどうかということになった。その話がまとまって調べてみると、その偉い人というのは五世川柳であったという。その後開かれた同組合の役員会で、句碑建立の相談がまとまり、役員一同13人が発起人となり、建立に当っては一切外部からの力をかりず、組合員だけからの拠金によることに

した。それから2年間、世話人達の奔走もあって、ようやく資金も集まり11月22日の建立となったのである。

碑の表面には大木笛我選文、富士野鞍馬書の五世の「和らかでかたく持ちたし人ごころ」という句が刻まれ、裏面には「天明七年丁未の出生、
腥^{なまぐさいたづくり} 佃と号し、岸廻姫松連々首たり、天保八年川柳五世継承、緑亭と名乗る。祖先は徳川氏開府の頃、家康の命に従い、摂州佃村より江戸に下り代々魚問屋を営む、此人孝子の誉れあり、度々公儀の褒賞を受け、又衆望を担い、永く佃島名主たり、安政五年八月十五日歿、行年七十二才、辞世、めでられし雅を思出に散る柳、墓場 築地本願寺和田堀廟所、昭和四十一年十月吉日 大木笛我選文、青木どくろ謹書」と刻まれ、その下に魚市場佃組合の人々21名の氏名と屋号、また発起人13名の氏名が、浜のや小林繁三謹書、松鶴年小山六造刻で、しるしてある。

11月22日には午後3時から住吉神社で五世川柳碑建立報告祭が営まれ、これには五世の子孫たる医学博士水谷仁をはじめ東都川柳長屋連、魚市場佃組合、内外タイムス社などの関係者達が参集した。また碑の除幕は水谷仁の令嬢によって行われた。午後5.30時から社務所二階で開かれた記念句会では佃組合建碑委員長小沢長吉代理相原倉吉と、東都川柳長屋連差配荻野義博との挨拶に続いて富士野鞍馬が「五世川柳について」大木笛我が「碑文を編んで、」、桂枝太郎が「現在の川柳について」と題してそれぞれ講演をした。これで第一部を終り、第二部に移って宿題「信心」荻野義博選、「名物」藤島茶六選、「全盛」関根木九選、「組合」臼倉寿夫選、特別課題「佃島の今昔」石井きんざ謝選、他に席題三題その他があった。このうち「佃島の今昔」に入選した25句のうちから面白いものを少し列記してみよう。

句碑新らた佃の意気も見せて建ち
江戸の香を嗅ぎに佃へ今も来る
らしくないビルも建ってる佃島

佃島の文化

佃島今は蜆も売りにくる
まだどこか明治が匂う佃島
佃煮のさかなは遠く他所の産
佃から橋が奪った江戸情緒
五世の碑に佃名所が一つ殖え
江戸からの家並がつづく佃島
熊さんも居そう佃の狭い露路
この外に五客の作のうち次の二句が注目をひく。
菊吉の舞台を偲ぶ佃島
横丁にまだ江戸がある佃島

昭和41年12月4日、私は二人の友人と今回の川柳碑建立に尽力した高橋金三郎（佃寅、石井きんざ）を佃島の私邸に訪い、五世の肖像画（水谷仁所蔵）、その他を見、またいろいろ参考になる話を聞いた。掛軸に表装されたこの肖像は黒の羽織、薄茶色の着物、青い縞のある袴をつけた五世晩年の座像で、その上部余白には次のような賛がしてある。「翁の壮年の頃も生業に怠りなく、行正しき事聞えて再びまで尊命を蒙り御褒美を賜りぬ、また花には入相をうらみ、月には更くるまで、首をかたむかせ、句を吟じ、余事を忘れし甲斐ありて、言の葉のしげみに良木を撰り、添削の斧当る身となりて、益々この道繁りて昔に倍せし榮えごと徳のいたれるならん、世の末も流れを汲むもの五世の教示をしたはざらめや。

其振りを道の目当ぞ玉柳

六世川柳

□□之□立冬

綾岡□摹

写 印」

五世作の川柳は数多くあるが、次にそのうちの七句を選んで附記しておく、「繩の洩たぐって佃藤の花、 異国から来ても鸚鵡は江戸言葉、 雪景色筆尻で掘る炬燵の火、 蠟燭のしん切る除夜の蕎麦の箸、 歌よみの目をふさいでるいい景色、 白魚の半ちょぼ泳ぐ生田川、 三日喰ふ雑煮で知れる飯の恩」。

五世の長子喜代松も長じて六世川柳となり和風亭と号した。六世の「つまらぬと云ふは小さな智恵袋」という句は有名である。これは有栖川宮熈仁親王の御感をうけ「川風の吹く片よりになびけども乱れざりけり青柳の糸」という御詠を六世に賜った。そこで六世は「吹き下ろす風にふれふす青柳」と詠じたと伝えられている。なお平岡好道所蔵の短冊に六世が「意地強さつらき雪にも笑ふ梅」と書き、その上の余白に好道の祖父好国が「むかし我妻のもとに此翁のおこせたりける句に」と書き加えたものがある。六世のこの句は好国の妻の性格を如実に詠んだものであると好道は私に説明した。

(4) 佃島関係の絵画

佃島に関係のある絵画は、特に錦絵類を加えると、かなり多数にのぼる。錦絵については既に言及したことがあるので、ここでは省略し、まず住吉神社または平岡家所蔵の絵画について述べてみよう。住吉神社の祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命の三神であるが、そのうちの一柱としての上(表)筒男命の神像を、猿田彦命の像と共に絹本掛物として一つの箱におさめたものが最近(昭和42・5)平岡家の土蔵で発見された。この二幅のうち一つは上筒男命が白い装束で波の上に立ち、片手に軍配を、他の手に四手のついた清めの櫛の小枝を持って海上安全の祓いをしている図である。また猿田彦命の神像は巨軀長鼻、緑衣をまとい、鉾を小脇にかかえ、右手には同じく四手のついた櫛の枝を携えて道案内をする図である。この二幅は第八代神主平岡好貞が国学者斉藤彦麿(1768-1854)に乞うて揮毫してもらったものである。彦麿は明和5年1月30日、三河国矢作の荻野家に生れ、廃絶していた斉藤家を再興し、石州浜田侯に仕えて江戸に住んだ。14才で歌人山本季鷹(加茂神社祠官)に歌道を学び、25才には本居宣長に師事して皇学国典を修め、神道に関する優れた学者となった。しかもこの二幅を見ると彦翁は絵画に於ても相当の達人であったことがわかる。さてこの二幅

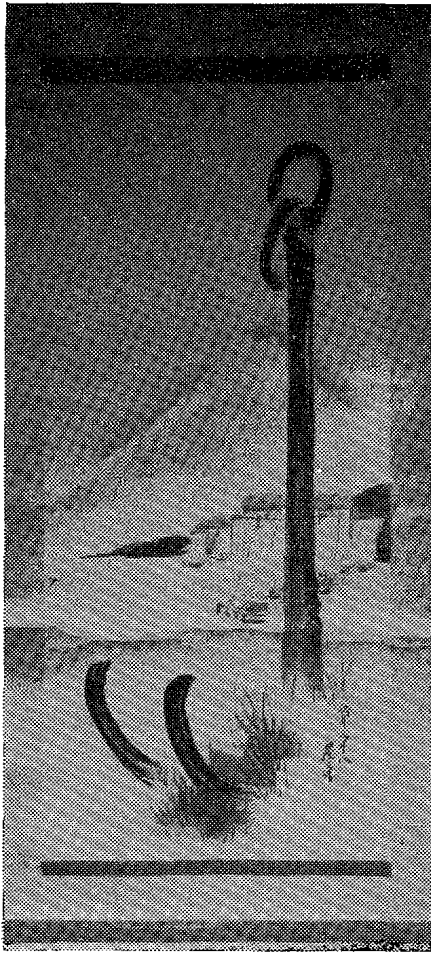
の絵については第十代神主平岡好文の書いた次のような経緯があったのであるから現神主好道もこれを発見して、大切に保管しなければならないと痛感したようである。二幅をおさめた箱の蓋の裏側にしるされた文章は下記の通りである。

「此二巻の神像はしも一つは我が遠つ祖より代々仕奉れる三柱の大神の御内なる上筒男之命の御像なり、一は猿田彦之命の御かたなり、俱に齊藤彦磨大人の画筆になれるものにして、家の秘蔵の二幅にそありける。そも此二幅は祖父好貞翁が齊藤大人に乞いてものしつるに起り、永く子孫に伝へん心なりしが、故ありて、好貞翁の二男好兼ぬしに譲りて数十年の間我が家をはなれたり、明治二十三年一月好兼伯父らまかりし時は此の二幅、知野根好光伯父の家に預けられてありけり。其を好光伯父持ち来て、父翁にかへし渡したりき。かくて後父翁表装を改めて家の重宝と蔵内に秘め祭りありしを、明治四十五年の春頃にや、ゆくりなくも、之を好春へ授け与えしかば、此二幅再び我家をはなれて橋場にありけり。されども己好文其を露しらず、我家にありける事と思ひつゝありしが、大正元年の十月二十九日夜、夢に大神の御影を見奉りしかば、つとめて朝、蔵内に往き此の神像を仰き奉らんとせしに、是はいかに、二幅の神像あらざれば、驚きつゝ父翁に問ひしに、前の如く好春に与えし事を始めて語りぬ。己その所謂なき理由を語り、吾を忘れて声高に説きしかば、父翁も遂に正理とおもほしけん、直ちに橋場に往きて持ちかへり来て、之を己に渡しけり。かれ此の二幅は再度家を出て、再度家に帰りし事の由をかきしるし、今より三度と家を出でん事を堅く停めんとほす。吾が子孫たるものは此の二幅は必ず嫡流に譲り伝えて枝葉のものに譲るべきものにあらざることをゆめわするゝなかれ。大正二年一月大神の祭日、即ち廿九日、新たに箱を造りて之を記す。十代平岡好文 花押」

この文章のうち父翁とあるのは好国のことである。また「此の二幅は必ず嫡流に譲りて云々」と書かれた家宝を嫡流たる好道が、最近発見するま

で、なぜその存在を知らなかったのであろうか。大正2年といえば好道はまだ中学生であったし、皇学国典の碩学である好文は、その道の大家であった斉藤彦磨に特別の尊敬心を抱き、その意味からもこの二幅を家人もみだりに近づけない場所におさめて置いたこと、また好文は昭和7年の秋頃から病気にかかり、翌年3月頃英国留学から好道の帰朝したときには、脳をおかされて口をきくことは勿論、意識さえも殆ど失っていたので、嫡流たる好道に遺言し、後事を託し、この秘宝について語る力もなかったのである。恐らくこうした事情があって、この二幅の絵が久しく好道にも知られていなかったのであろう。

住吉神社幣殿左右の鴨居の上にはそれぞれ柴田是真と尾形月耕の描いた絵の額が掛けてある。尾形月耕(1859-1920)は日本画家で、錦絵や絵入新聞、雑誌などの漫画でも当時好評を博した人である。幣殿内の彼の作(8.2×5.6cm)は金箔を置いた桐の板に、雲冠を戴き、赤の装束をつけ、竜神の仮面をかぶって舞う人物を描いた佳作である。また左側板壁に掛けられた柴田是真(1801-1891)の絵(18.×11.6cm)も金地の桐板の上に葦の淋しく自生する水辺に戯れる六羽の白鷺を画いたものである。白鷺はこの神社の代紋に採用されてる佃島に縁の深い鳥であるから、この絵を幣殿内に掛けるのは処を得ていると云えよう。けれどもこの力作がこのような暗く、殆ど人目に触れない場所に隠れているのは措しいようにも思われる。是真は日本画家としてばかりではなく、漆芸家、宮彫師としても幕末から明治前半にかけて活躍した。彼は平岡好国と親交があり、そのためか平岡家には彼の絵が数種所蔵されている。滝を是真、鯉を川端玉章(1842-1913)が描いた一幅の絵もその一つである。また春日三笠山を描いた絵には行年七十七翁、対柳居是真と自書してある。明治9年作のこの絵はやや高く緑の三笠山、その中腹に遊ぶ四頭の鹿、山の右側に大きく茂る森を写した風景である。ただそれだけでは別に取りたてて問題にすることもないが、是真は、好国の求めに応じて、黒く茂る森の彼方に飛翔する一群の白鷺を小さく画

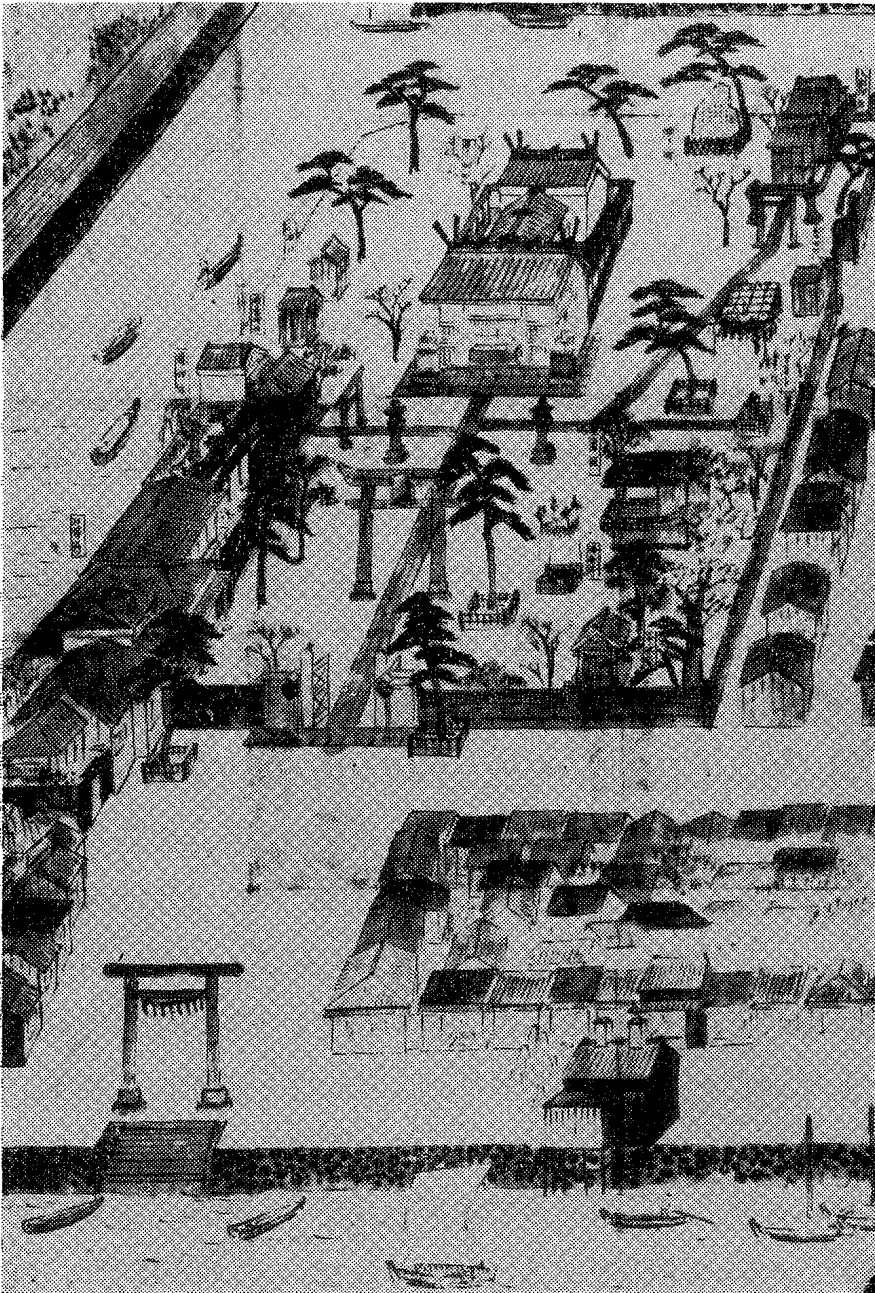


是真画佃島風景

き加え、それによって佃島住吉神社を象徴したのである。

平岡家所蔵の是真の作で一番興味深く感じたのは佃島から見た富士山の風景画である。これには「行年七十八、是真」の落款がある。まず前景には中央からやや右寄りに、画面全体を圧するように巨大な碇が長い足を垂直に立て、彎曲する四つの腕をどっしりと草むす地上に据えている（これを四爪の碇という人もあるが、この碇の絵には爪はない）。次に前景から漸次に離れて、海上を雁行する船の白帆、行く手に黒く横たわる小高い陸地、はるかに聳える白雪の富士などが眺められる。こうした情景を描いたこの絵は別に美しいとも思えず、また遠近描写の手法に多少面白くない点もあるが、ここで問題となるのは前景の大碇であ

る。この碇の存在は佃島の歴史を知るものであれば誰れしもあゝそうかとすぐ^{うなず}頷けるはずである。たしかに佃島のような小さな離れ島の漁村に鍛冶屋があって、住吉碇と評判される碇を生産していたことは、一つの驚きであったに違いない。けれども「名主、神主、碇鍛冶」と云ってこの三者は佃島の住民には最も大切な、また代表的な存在だったのである。また宝永7年(1710)の佃島沽巻図にも鍛冶細工部屋の位置が明示されている。従って遅くともこの年には既に碇鍛冶の佃島にあったことは否定できない。関西方面から航海してきた船員は船を鉄砲洲に泊めて、その間に住吉碇を造らせたというし、「大浪のうごかでここに住吉の碇鍛冶まである佃島」(春道、安政3年刊行、狂歌江戸図会)と歌われもしたのである。碇を一つ大



住吉神社境内とその近所（明治二〇年頃の絵図）

きく画いただけで佃島を代表させた是真もこうした事実を念頭に置いていた
たのであろう。明治20年頃の住吉神社と、その前方にあった民家の配置を
示した絵図⁽¹¹⁾によると、現在の佃一丁目2の10、小林吉太郎(丸久)の住む家
のあたりに存在した碇鍛冶細工所（屋上には二本の煙出しが画いてある）

の位置と外形がよくわかる。また道路をへだてたすぐ筋向いの、現在川上長澄（高知の室戸から転住）の住む家こそは長年碇鍛冶を営んでいた山口（現当主は佃には住んでいない）の店舗だったのである。この家は佃でも最も古い建物の一つで、今でも注目すべき特徴をそなえた立派な造りである。

佃島の景観を伝えた画家のうちで異色のあったのは亜欧堂田善（1748-1822）である。最近私は神奈川県立博物館で開かれた近世洋風画名作展で田善の絹本着色の肉筆、筆彩及び墨一色の銅版画など15点を親しく見る機会を得たが、この画家についての知識は極めて乏しい。しかし幸に私が学生時代に講義を聴いたことのある美術史の沢村専太郎教授が田善の家系、履歴、銅版画などを克明に調べて書いた⁽¹²⁾「亜欧堂田善の銅版画について」と題する評伝があるので、それを参考にして少しく田善について述べてみよう。田善は福島県須賀川の出身で永田を氏とし、通称を善吉と云い、その氏名を約して田善と号した。彼はその祖先の出生地たる伊勢の画家月僊に絵画を学び、後、谷文晁（1763-1840）に師事した。沢村の引用した「永田由緒」によると、「寛政十年楽翁公の江戸屋敷より田善に出府の命ありしかば、彼は急ぎて江戸に來りしに、先年和蘭より將軍家へ世界万国銅版画を献納せしに、之を楽翁公に賜りしが、公は之を田善に示して、此技術を能くする者あらざるは甚だ遺憾なり、汝之を試みて完成せしむべしと云へり。田善之を聞きて、其画法の和漢画とは異なるものあるを以て、是れがためには、特に西洋画を研究するにあらざれば、その功を遂げ難しとなし、之を公に告ぐ、公之を理ありとなせり。是に於て彼は公に請ひて、斯術研究のため長崎に向って発足せり、時に寛政十一年なりき、彼は長崎に止ること四年にして、再び江戸に歸り來り、其研究する所を傾けて銅版画を製し、公に示して其感悦を獲たり」と。これによって田善が平賀源内（1726-79）、司馬江漢（1738-1818）と共にわが国に於ける西洋画、殊に銅版画法と印刷術の進歩に大きな功績を挙げた事情が明らかになる。私の見た田善の銅版画

の中には金竜山図 (25.3×52.1cm) やゼルマニア廓中図 (25.6×52.3cm) のように大版のものもあるが、佃浦風景図 (11.4×18.5) などは極めて小さなものである。この風景図では二匹の犬がいがみ合っているそばに、それを見ている一人の漁師風の男が魚簗を地面におろし、長い天秤棒に身を支えて立つ、また烈風に荒く波立つ海をへだてて軒をつらねる佃島の民家の有様が描かれている。他方中央区史、上巻の口絵⁽¹³⁾、小野忠重編「日本の銅版と石版」⁽¹⁴⁾その他の図版として掲載された田善の「佃島真景」は筆彩の小版銅版画で、彼の江戸名所絵のうちでも優れたものとされている。この版画では佃島海岸沿いのやや高い蔵のような建物の外壁のところに二人の男が何か話し合いをしており、その左側の建物の窓からは煙が空に立ちのぼり、海上には七、八人の客を乗せた渡舟、白帆の小船、大きな廻船などが描かれ、右側には遙かに江戸の海岸が望まれるという図である。⁽¹⁵⁾ 佃島年表を見ると享和2年(1802)3月、亜欧堂田善、白川鹿島神社に油絵額「江戸佃島より品川を望む図」を奉納(絵画叢誌195号)と記してある。これもまだ実物を見ていない私にとっては刺激的な記事である。なお田善の門弟遠藤田一は「佃島真景」の構図をそのまま写し、大きな洋風の絵に仕立てて、天保元年(1830)、福島県田村郡守山町の田村神社に奉納した。現に同神社の外部軒間に掲げてある大きな絵馬こそは田一のこの作で、それには「文政十庚寅年三月吉祥日 佃島南望之図 曙山楼田一」と記され、佃島漁民の生活を写実的によく表現しているという。

江戸時代に銅版画、大津絵、絵馬、芝居の書割などと共に、民衆絵画の一種として、広く愛好されたものに泥絵と通称されるものがある。これは、いうまでもなく、いわゆる泥絵具で大名屋敷、江戸、東海道その他の名所風景、あるいは異国情景などを名もない民衆画家が描いたものである。それ故泥絵には落款も制作年月も記入してないが、なかには非常に美しい佳作もある。建築家大熊喜邦著「泥絵と大名屋敷」(昭和14)に掲載された30枚の泥絵などは徳川時代の建物、風景などを調べる場合、日本の建築史や絵画

史の上からも貴重な資料である。幕末と明治の各種民衆絵画の蒐集と研究で著名な畏友吉田小五郎⁽¹⁶⁾の意見によると、泥絵という呼名は大正元年から5年位の間に使用され、油絵具に対する泥絵具だから命名者は洋画家らしいとのことである。京都時代の岸田劉生の身边で催された展覧会（特に大正13年の「西洋の影響をうけた支那画及び日本画展」及び14年の「明治以前洋画展」）などでははっきり泥絵の名で陳列されたというから、この頃から一般に通用したものとみられている。劉生もこれを蒐集し、土呂絵と書いていた由であるが、その泥絵具というのは貝殻を砕いて作った粉、即ちはまぐり粉、または胡粉をまぜた水性の安絵具のことである。泥絵が胡粉絵と呼ばれるのもそのためである。吉田小五郎は淡島寒月（1859-1916）の書簡に次の回想文のあることを指摘した。「老生明治初年の少年時代に芝日陰町に一軒泥絵を描き売り候えしが、胡粉とアイにて大名屋敷などを遠見に描き、向島の土手より浅草の観音を遠見にいたすもの、川に永代橋より佃島を見候ものなど掛けつらね売り居り候老人御座候」と。これを読んで



深川新地より見た佃島（泥絵）

も佃島を画題として選んだ泥絵師のあったことが明かであり、恐らく他にも佃島風景を画いた泥絵は、浮世絵の場合と同様に、少くなかったものと思われる。現に私の手許にも深川新地から見た佃島の泥絵が一枚ある。これは、縦 33. 横 44cm ほどの絵でやや厚い紙にまず胡粉を一面に塗って地となし、その上から主として藍及び褐色の不透明な泥絵具で島、樹木、家屋、舟などを描いた作品である。例によって画師の名も制作年月もしるしてないが、深川新地から佃島とその周囲の広々とした海が一望のもとに眺められるところから察すれば、少くとも明治以前のかかなり古い時代の風景画であることは間違いないと思う。画面全体の約 $\frac{1}{3}$ を占める広い部分はやや薄い青(上部)と白い胡粉(下部)で描かれた空である。その白い空はそのまま同じく白い海とつながり、海空の境界は遠望される低い島かげによって見分けられる。右手には深川新地の大きな家屋、築地、堤防や緑濃い庭が海岸沿いに画かれ、また海の中央には緑の樹木に覆われた佃島がはっきりと見られる。海上には遠く、近く白帆の船が浮び、帆柱を林立させる廻船の群は島の手前と、その右手の海に碇泊する。新地通いの嫖客や、佃ぶしを歌う船頭を連想させる屋根舟や猪牙舟は褐色の泥絵具で極めて簡単に、しかも躍動的に描写されている。新地からはまた胡粉で画かれた白雪の富士が望まれる。要するにこの絵は佃島とその周辺の風景を、粗末な泥絵具で、よくもこれまでに美しく描写したものと感心される佳作である。

(5) 住吉神社の建築

本祭、陰祭、その他重要な行事の時だけでなく、平日の住吉神社を訪れて、第一に感じるのは神社と住民との結びつきが、いかにも親密で、また深いことである。ふだん着のまま、用足しに出た序にといったような格好で静かに拍手を打ち、瞑目して何事かを祈願する近所のおかみさんが、帰りしなに、人影もない境内に落ちている紙屑を、そっと拾って割烹着のポケットに入れて、何気なく立ち去って行く。これが佃の人々と神社との日

常の関係であって、彼らにとって住吉様は自宅の神棚の延長であり、住吉様を拝み、これを大切に守るのは、何の理窟もない当然の勤めであり、奉仕なのである。事実、神社もまた、このふだん着のおかみさんによって代表される庶民的な氏子たちの切実な祈願と、私心のない奉仕によって三百数十年の存在を続けてきた。そこには少しも上からの威圧や強制などを連想させるものはない。同様にこの神社の建物も、下駄をぬげば、誰れでもすぐ拝殿に上れるほどその床は低く、どこを見てもこけおどしや虚飾がなく、すべて純真、簡素である。現在の社殿は、内陣土蔵（天保時代）を除き、慶応2年(1866)の焼失後、明治2年(1869)に再建されたものである。その後明治43年には内陣土蔵をはじめ幣殿、拝殿などの全部にわたる大修理が行われ、また昭和8年頃には内陣土蔵以外の屋根をすべて新しい銅板葺に変更して今日に至っている。関東大震災にも、また太平洋戦争にも殆ど大した被害のなかったのはまことに幸運であった。

さて住吉神社の建築について考える場合、まづ第一に問題となるのは、一体神社とはいかなる性質のものかということである。これについては専門の神道学者の間にいろいろむづかしい議論もあるであろうが、ここでは建築学者⁽¹⁷⁾伊東忠太に従って、「神社とはわが国の皇祖皇宗、天神地祇、臣下の特に功績あり、記念すべき事蹟のあるものを祭る所を意味し、神社建築とはこの祭祀に必要な建物である」としておく。佃の住吉神社が天照大神の兄神に当る表筒男、中筒男、底筒男の三命の神をはじめ神功皇后、更に臣下として特に功績あり、また佃島漁民の祖先が恩恵をうけた徳川家康をも加えて、五座の神々を祭ることからみても、伊東の右の定義はこの神社にそのままよく当てはまる。次に問題となるのは住吉の社殿が果して神社建築としての性質をよく具現しているかということである。わが国の神社建築は古来⁽¹⁸⁾次の4性質を特徴として発達してきた。(1)屋根の形が切妻であること、(2)屋根を瓦で葺かないこと、(3)下地壁を用いないこと、(4)装飾の質素なこと。以上の4性質は果して佃の住吉神社に於て

そのまま発揮されているであろうか。まず同社の土蔵内にある本殿(正殿)は完全にこの性質を充たしている。内陣は現在、厚い土壁から成る土蔵内にあって、外からは見えない。また土蔵内に入っても暗いので電気をつけないとよく見えない。けれどもその本殿が檜皮葺、切妻屋根をもち下地の土壁などのない、純然たる板壁をめぐらし、更に装飾らしいものの殆どない極めて簡素な造りであることは明かである。なおこの本殿を含む土蔵の梁の上に保存されていた一升杓と小さな杵との埃をはらって見たら「天保十五辛丑年四月吉日 佃島住吉宮上棟 森田嘉衛門、藤原尹知」と墨書されていて、本殿と土蔵との再建された年月がわかり、また上棟式に柱を打った小さな杵と、餅と豆を撒く時の杓とが当日の記念品として保存されていたことが明かにされた。もちろん本殿を内包する土蔵は火災に対する用心のため天保年間に設けられたものであろう。平岡家所蔵の古い絵図(年代不明)を見ると土蔵はなく、拝殿とはほぼ同じ大きさの茅葺神明造の本殿が独立に建っていた。ところが天保以後、本殿は土蔵内に置かれ、しかも土蔵と拝殿とは、現在のように、幣殿と連結されるに至った。土蔵は恐らくはじめから瓦葺であったろうが、他の社殿の屋根は、古い錦絵などにも描かれているように、いつも茅葺であった。そしてそれは恐らく明治になってから瓦葺とされ、更に昭和に入って、現在のように、銅板葺に替えられたのである。神社の屋根を瓦ではなく、茅、檜皮、柿板などで葺くのは原則であったろうが、伊勢大神宮は20年、加茂、春日の両社は30年、出雲大社は60年というように式年造替の制のない民間の、しかも大都市内の神社がいつまでも草葺又は板葺を保持できなかったのは火災予防の点からも、また造営の経費の点からも当然というべきである。

次に住吉の社殿は神社建築のうちいかなる様式に属するものであろうか。同社の神主が社殿の修理その他の工事に際してその都度東京府知事宛に提出した数回の登録申請書を見ると、内陣、幣殿、拝殿は何れも神明造として届けてある。神明造は、いうまでもなく、伊勢の内宮、外宮のいわ

ゆる唯一神明造の純粹形式を基とし、それから時代により、また必要に応じて変転し、複雑化した神社建築様式ではあるが、大社造と共に古く、また建築に於ける日本固有の特徴をよく発揮したものである。神明造の主な特徴としては次の⁽¹⁹⁾五性質を挙げることができる。(1)屋根の上に千木、勝男木があり、棟には覆を冠し、その下に泥障板^{あをりいた}がある。(2)屋根は直線形で茅、檜皮、柿板、銅板などをもって葺き、瓦を用いない。(3)素木造、切妻平入りで、絶対に絵様彫刻の類を用いない。(4)破風と千木は必ず一直線内にある。(5)棟持柱、長小舞を備える。

住吉の本殿がこれらの性質をよく具現していることは勿論であるが、そのほかの外から見える建物のうち、土蔵と拝殿の屋根には千木と勝男木、またこの二つの建物を連結する幣殿と土間との一連の屋根には勝男木だけが載せてある。更にこれらの屋根の頂部を占める棟には棟包としての覆があり、棟の左右には泥障板が馬乗りになって傾斜し、雨押えの役を果たしている。千木以下泥障板に至る諸材は何れも既に緑青色と化した銅板で包まれ、その他の部分の用材には絵様彫刻などはなく、素朴な白木のまま社殿を構成している。またこの神社の社殿は、大社造のような妻入り（切妻または破風のある方から出入すること）ではなく、いわゆる切妻平入りである。つまり切妻と直角をなす方向を正面とし、その正面から社殿に出入する様式である。千木もまた規則通りに破風板に対して一直線の位置にある。ただ住吉の千木は、その先端を垂直に切る外そぎであって、伊勢大神宮の千木のように、その頂上を水平に切る内そぎではない。平岡好道の話によると、内そぎは女神を祭る神社の千木であり、外そぎは男神を祭ることを現わすそうである。住吉の勝男木は拝殿の屋根では七本、幣殿では五本、土蔵では五本あって、何れも断面円形、中腹のところがやや太くなっており、千木と同様に、銅板で包まれている。千木と勝男木の存在は、大陸建築の影響を受けないわが国原始時代の住居の倣を遺すものとされている。千木は大古、小屋を造るときの二本の斜材を、その交叉する所で切らずに、

そのまま一直線に突き出させたことの遺風を伝えたものであるから、その存在理由もよくわかるが、勝男木が何のために屋上に置かれたかは不明である。貝原益軒や本居宣長によると堅魚木（鰹木）の由来は常食とする堅魚が屋根の上で乾かされたから、当時の住宅に似せて神社を建てる場合、その堅魚ののっているままの形に作られたと見なされ、大言海は「円く長く中豊まかぶくらにして鰹節の形したり」としている。しかし鰹節とはあまり似ていないとして勝男木は「戴かづけあふ木」であるとか、葛の緒を以て屋上に結び堅める木という意味で、葛緒木であるとなす説もある。しかし東京鰹節問屋組合（佃島住吉神社と関係深く、同社境内に鰹塚を建立した）の編纂した「⁽²⁰⁾かつをぶし」では特に古事記の朝倉宮の段にある「堅魚を上げて舎屋を作れる家有り」という記事に重点を置き、鰹節の前身たる堅魚こそは勝男木の起原であったに違いないと主張している。何れにしても佃島で千木、勝男木をそなえた古式の神社建築が、周囲の景観の著しい変化にもかかわらず、厳然として鎮座しているのはまことにゆかしい。

また棟持柱というのは妻の中央側柱の外側に、別に立てて棟木の突出部を支える柱のことであるが、現在の住吉社の拝殿の妻では、それが棟下から地面に達するような長さではなく、極めて短く、下にある梁のところで切られている。更に長小舞は屋根のこけら板などを支承するたるき極の上に取りつける屋根裏板で、銅板葺となった現在の拝殿と幣殿では、果して長小舞がついているか否か、外からは全く見えない。以上神社建築及び普通の神明造の諸性質を住吉の現存社殿について点検してみたが、多少の変異はあっても、この社殿が神明造の神社建築として比較的に正しく、且つその素朴な性質をよく示していることに間違はない。そこで次にこの神社の社殿を個別的に観察し、更に全体をまとめて概観してみよう。

まず正面からこの神社の社殿を見ると、柱間三間の拝殿がある。その最前線に立ち並ぶ四本の円柱は三つの間を作るが、中の間は 3.5 m、左右の間は各 1.64 m であり、前述の通り切妻平入りである。また左右両間には

それぞれ、奥行きの間の場合と同様に、上下二段の縦横格子造の^{しとみど}蔀戸^{しとみど}があって、ふだんは閉じてあるが、行事の際には取りはずされて拝殿を一層広く開放する。面積12坪の拝殿の床は非常に低く、地上わずかに0.4mに過ぎない。拝殿の鴨居の上には現衆議院議長石井光次郎書の神号額を中心として、各種の間屋、組合などの献額が掛けてあって仲々賑かであるが、建物自体は素木の肌をそのまま露出し、彩色も彫刻もなく、まことに簡素である。拝殿と、それより0.15m高い板敷の床をもつ幣殿との間には大きな格子戸がある。この格子戸は久しく金網張りであったが、近頃は埃がひどく入るようになったので硝子張りに替えられた。幣殿の広さはわずかに五坪に過ぎないが、その右側には詰所（二坪）、左側には御供所（二坪）が隣接しているから、行事の折などには、それら左右の場所に通ずる夫々の引違い板戸を取りはずして、楽人や陪膳の神官が神事を営む余地を作る。ここも拝殿と同様に板壁と格天井の極めて簡素な造りである。幣殿の奥は床を低く0.4mばかり落した土間となる。平岡家所蔵の前述の古絵図を見ると、この土間に相当する部分は露天の空地で、そこには一対の灯籠が置いてあった。しかもその時代の本殿は、今のように土蔵内にあるのではなく、拝殿とほぼ同じ大きさの独立社殿であった。ところが現在の土間は同じ屋根の下で幣殿と連結し、いわば中殿とでも云える場所を占め、天井と障子窓のある一つの室を成している。ここはもと文字通りの土間であったが、いつの頃からか、コンクリートで固められ、わずかに右側手前に小さく仕切られた炉の処だけが土のままになっている。そしてこの炉と相称的な左側手前の位置にはコンクリートの床を穿った小さな孔が開けてあって、炉とこの小孔とに一対の燎器を吊す鉄の柄が立てられる。行事の際には箆形の鉄製燎器に松の割木を入れて赤々と燃すのである。また土間の中央には幅0.98、長さ2.45mの歩み板が縦に敷いてあって、その上を渡る¹と五級の階段に達する。この階段の昇勾欄と、その上の大床の椽の勾欄とは擬宝珠柱に結ばれている。そしてこの勾欄と擬宝珠柱の存在は、周囲の

簡素さに比べてやや装飾的であって、後世の手法によるものである。大床をそなえた外陣はまた神饌所でもある。その突き当りの土蔵入口を囲む板壁は天井の長押から床まで垂れ下る清楚な帷^{とばり}で覆われ、入口には幅の広い御簾^{みす}がかかり、その前面に設けられた白木の長い神饌案には神饌献供用の三方が七台載せてある。土蔵入口の厚い両開扉のなかは内陣となる。ここには須弥壇に似たかなり高い壇があり、その上の五級の階段は小型の本殿に導く。本殿は高さ約 1.8 m しかない工芸的建築であるから、その階段を昇ることも、更に本殿の中に入ることもできない。檜皮葺、神明造のこの小さな本殿は正面三間あり、各間にそれぞれ両開扉が作られ、その中に住吉三神、神功皇后及び徳川家康の計五座の神体が奉安してある。そして本殿の前には左右一對の立派な幣帛が立ち、その一方には精麻、他方には羽二重の帛がそれぞれ幣棒をかくして垂れている。

以上各社殿の観察によってもわかるように現在の住吉神社の建築はかなり複雑である。今仮りに神社建築様式の変遷を三段階に分けて考えると、第一は大社造から大鳥造、住吉造を経て神明造に至るわが国上古の宮室乃至住家の発達に伴う自然的変遷を特色とするもので、これこそは大和民族の建築様式として最も純粋な性質を発揮している。第二は春日造、流造、八幡造、聖帝造などの様式出現の段階で、在来の神社建築が仏寺建築の影響をうけ、曲線形をとり入れたものである。そして第三は主として鎌倉時代以降、多種多様の発展を遂げた一般建築の様相が神社建築に反映して、従来の様式からみて変形、変種と思われるものが生じた段階である。そこで佃島の住吉神社はこの三段階のうち、主としてどれに近いかが問題となる。この神社の拝殿、本殿が神明造であることは既述の通りであるが、これらの諸殿を総合的全体としてみると、それはかなり複雑化して中世以後の、⁽²¹⁾伊東忠太のいわゆる本殿拝殿連結時代の様式に属するものである。佃では切妻の土蔵（本殿を内包する）と拝殿とが平行して前後に並び、幣殿と土間との棟が、土蔵と拝殿との棟に対して直角をなして連結してい

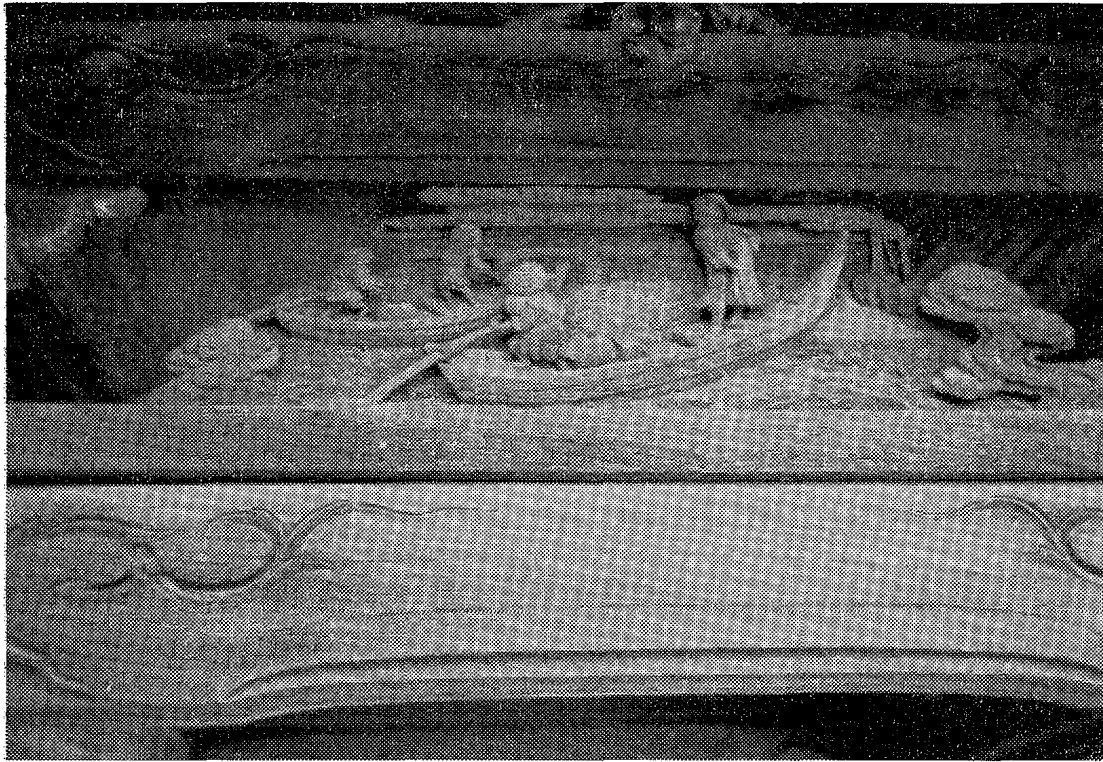
る。従って幣殿は他の二殿に挟まれた中殿に相当し、その棟の長さと、軒の高さも他殿に比べて短く、低い。このようにして土蔵、幣殿、拝殿の三殿が工の字形に連結して、一つの総合建築となっているのであるから、それはまさに本殿拝殿連結様式としての権現造の一性質を示している。更にまた土間の存在は権現造における石の間（中殿の床が拝殿、本殿よりも一段と低くなっている土間のような性質をもつもの）に相当するから、その点で現在の住吉社殿が権現造に通ずる面を持つことは否定できない。このように見えてくると、佃の住吉神社は本来純然たる神明造で、あくまで直線的、無装飾的な簡単な建物であったが、幕末頃から権現造の社殿配置を採用して今日に至ったものと考えてよいと思う。

（6）住吉神社境内の木彫

住吉神社の境内では、本社にしても竜神社その他の境内諸社にしても、別に取りたてて問題にするほど注目に価する建物ではない。けれどもそうした建物のうちにも、ふと見て、これは面白いと心を引かれる木彫がいく



住吉神社正門扉の木彫



手 水 舎 の 木 彫

つかある。たとえば神社正面の表門（明治44・昭和8・改築）は門柱の上部を貫く横木、即ち冠木を欠くため冠木門とは云えないが、その大きな両開扉に見られる^{かつらさぎ}髪鷺（頭上と後頭の間に細い飾羽のある鷺）の浮彫はすばらしい。それは左右の各扉のそれぞれほぼ中央に浮き出す直径40cmの円板を満月に見たて、その表面にはみ出るほど一ぱいに羽根をひろげて天がける鷺を浮彫りにしたものである。昔、佃島の漁師は、この附近に多く集まる鷺の飛翔状態によって天候を予知し、火災の突発を速報されたというが、そのためか、鷺様と呼んで、これに敬意を表していた、髪鷺はまた、いつの頃からか、神社のかげ紋（替紋）として図案化され、祭りの幔幕や、揃いの浴衣などにも染めるようになった。これと同じ紋所を青銅の浮彫りにしたものは月島9丁目の住吉神社旅所で見られる。それは同旅所の正面に据えられた賽銭箱の円形銅板で、そこに浮彫りされた髪鷺の姿も仲々美しい。これに反して佃島住吉本社の銅張り大賽銭箱の青銅浮彫りは羽根をひ

ろげた二羽の鷺を、あだかも下り藤の紋所のように、左右から輪状に向い合せたもので、紋らしく整ってはいるが、図柄としての面白味は少いように思う。なお住吉神社の正式の紋所は、住吉三神を象徴する三つ星で、三個の円を品の字の形に並べたものである。この正紋は本社前、左右に置かれた石造大水盤の前面、その他にも見られるが、一番美しいと思ったのは本祭や陰祭の折に、本社正面左右に立てられる錦旗（昭和5.魚市場佃組合奉納）の三つ星である。この一對の錦旗は幅狭く、たけの長い、地厚華麗な絹織物で、その上部に金糸で刺繍した丸に三つ星の紋は気品のある、実に立派な作である。

次に表門を入るとすぐ右側に見える手水舎（明治2, 同44改築, 昭和8屋根葺替）にも面白い木彫がある。この手水舎は天保12年献納の古い石造手水鉢（今は、かなり破損、コンクリートで乱暴な修理がしてある）を中心に、四基の角柱を立て、瓦葺両切妻の屋根を戴く小さな木造建物（一坪）である。けれども、その四方の欄間には漁師の海上生活、渡船、海岸の風景などを刻んだ稚拙な木彫が各面一枚ずつとりつけてあって、見るものを一周させ、思わぬ感興を起させる。中でも波立つ海に櫓をこぎ、網を打つ二人の漁師をのせた小舟二隻の図と、遠近二艘の帆船と枝ぶりのよい岸の松の図を浮彫りにした各一枚は見応えのある作である。なおこの手水舎四隅の角柱と軒の組物との間から勢よく疾走するが如き獅子を丸彫りにした木鼻も注目をひく。

次に木造瓦葺入母屋造の神楽殿（11坪余）は大正12年の大震災以後の拡大改築で、これも別に見栄えのする建物ではないが、ただその左右両脇障子にはめ込まれた透彫の板（ 1.18×0.3 ）¹⁾は面白い。右側の板は荒天の林野に吠える一頭の牡獅子の獰猛な姿を、また左側の板は牝獅子が最愛の子獅子を谷につき落して、上下相對する母子の有様を劇的に透彫したもので、共に黒くよごれてはいるが、よく見るとかなりの力作である。

住吉神社の社務所は、関東大震災の時、かなり傷んだので、その後氏子

連や、特に金子政吉(佃政)の特別の援助をうけて改築の運びに至り、昭和2年5月に竣成した。これが現在の建物で、延坪72.5、瓦葺二階建の部分と、22.5坪の平家建の部分とから成り、佃島では最も大きな建物の一つである。震災後建築資材不足の頃に建てたもので、特に注目するに足る建物ではないが木彫としては正面玄関上の妻飾が挙げられるであろう。この妻飾の透彫は玄関を覆う屋根のむくり破風板の^{おがみ}拌みに幅広く垂下する懸魚である。何の装りもない、むしろ殺風景な社務所の建物に、波と亀の図柄の木彫をあしらったところに工匠の人知れぬ苦心があったのであろう。社務所の二階は、その四室の^{ふすま}襖をはずすと畳敷の大広間となり、更に南側廊下の障子を除去すれば優に百数十人を収容できるから、神社関係ばかりではなく、公私、大小さまざまな集会に利用され、頗る便利である。従ってここは佃の人々にとって、町の公会堂のように使用されることもある。その上に、ここは神主の私宅ともなっているから、訪れるものは公の用を弁ずると共に、私的情誼を温めることも多く、それだけ町の人々に親しまれている。三百数十年来、この地に住み、この社を守り続けて、他に移転したことのない平岡家は、東京でも珍らしい旧家である。親子三代東京に住めば江戸っ子だというのが、現祠官平岡好道の如きは3代どころか、11代に及ぶ生粋の江戸子である。好道が「古い点じゃ、徳川さんと、どっこい、どっこいだ、その徳川家だって維新後は住居が変っている。あたしんところは、ここに住みっぱなしだからね」とよく友達に語るのも無理はない。二代、三代で江戸っ子ぶっている人などは到底立ち打ちのできるものではない。

(7) 佃島の民俗

(a) 住吉の祭

住吉神社本祭(4年目毎に執行)の第一日目には氏子の住む各町の神輿が、佃小橋から旧渡船場に至る主要道路に、勢揃してそれぞれ神主による清拔

をうけ、勇み肌の若衆にかつがれて各方面に出発する。これらの神輿には仲々豪華なものもあるが、何れも四角であるから、その点で八角の本社の神輿と識別できる。神輿は元来神霊の渡御の際に、それを奉安する輿のことである。その起原は不明であるが、現存最古のものとしては和歌山県粉河町の鞆湊八幡神社所蔵の沃懸地螺鈿金銅製神輿が挙げられる。この豪華な神輿は安貞時代（1227-1228）以前の作と推定され、昭和年31国宝の指定をうけた。私は数年前会津若松の伊佐須美神社参拝の折、朱塗金銅製のやや武骨な神輿（1527作、重要文化財）を見たことがある。以上二つは何れも四角であるが、一般に神輿は木製黒塗が普通で、形は四角のほかに六角または八角のものもある。住吉神社の神輿は天保年間の作で、木製黒塗りであるが、もとの新佃島や月島各町の四角のものとは違って、八角の立派なものである。神主の説明によると、この神輿の八角であるのは、黒塗三層継壇の上に八角の屋根を据えた高御座（紫宸殿または大極殿の中央にある御座）に倣ったものだという。やや急勾配の屋蓋頂上には、金色燦然たる鳳凰が羽根をひろげて立ち、八方の降棟、反転する軒先と軒回り、軸部の桁、その他の要所を金、銀色の金具で飾り、特に八周に垂れる透彫金具の帷、軒の八隅に下がる風鐸など、何れも美事である。もちろんこの神輿は4年目に一度、本祭のときだけ出社して巡行することになってはいるが、例外として、たとえば、大正天皇御即位の折に二重橋前まで舁ぎ出され、また最近では1964年8月27日の佃大橋開通式のときにも渡初めの行列に参加したように、臨時の出社をする場合もある。けれども、いつの頃からか、原則として陰祭には巡行することなく、その折に神輿は縦横格子の蔀戸をはずした拝殿右側板敷の上に安置され、参詣者の拝礼を受けるのである。神輿を保管する神輿庫は社殿と石川島側の舟入堀との間にあり、明治44年新築の煉瓦造二階建である。私は祭の後、神輿の轆を抜き出し、鳳凰の金物、八角の屋蓋などを取りはずして解体し、庫に入れ納める有様を見たことがあるが、これは仲々面倒な作業で、鳶職の頭のようによく馴れた人で

ないと、手順よく、迅速に運ぶことは出来ないものだった。

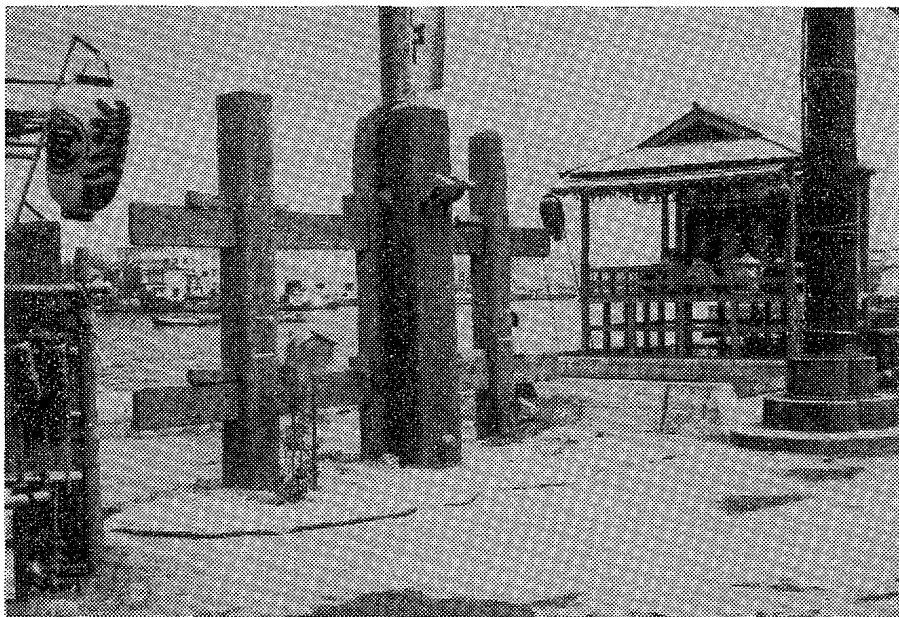
太平洋戦争以前まで久しく佃には氏子の間に子供、小若、中若、大若、世話役、年寄など呼ばれる等級があって、上位下位の序列が厳しく、下位者は上位者に絶対服従であった。また4年毎の神社本祭の時でない子供から小若へ、大若から世話焼へというような昇級も行われなかった。その上本祭は必ずしも4年目に一度開催されるとは限らず、たとえば不漁、不景気で、揃いの衣裳の作れない時には延期されたりした。明治29年の次の本祭は10年後の39年まで見送られ、そのため上述の小若、中若などの昇進が止まり、年はとっても等級は依然としてもとのままであったという。またその頃神輿を昇ぐ人々は新調のちりめんや絹の浴衣を着たまま、川の中に入ったのであるから、当時としても仲々贅沢だったのである。ここに佃島漁村以来の漁民^{かたぎ}氣質が窺われ、しかもその氣質は今でも多少消えずに残っている。三百数十年以来の地域社会と云えば、住民も定めし保守、反動だろうと思われそうだが、実はその反対で、古くから土着している佃の人々は、多少粗暴な点もないではないが、常に進取の気性に富み、島内はもちろん、近隣諸地域にも活気を添える力をもっていた。彼等はその漁師的、刹那的心理を消費の面にも反映して、手許に金のあるときは即座に使いはたし、たとえば神社の祭礼、七五三の祝、結婚式などの行事には、身分不相応な大金を投じて、派手な騒ぎを演じ、所持金全部を消費するが、所持金のない時は借金しても、それらの行事を盛大にしようとする傾向があったのである。

住吉の祭りは、佃の住民にとって、最も楽しいものであり、今の古老に聞いてみても、子供の時分からこれ程思い出の深い楽しみはなかったと語る。太い立派な角材の枠組に支えられた18mもある長い^さ櫓にはためく^{のぼり}大幟、島内数か処に仮設されるよしず張りの小屋の幔幕、境内の神楽殿をはじめ、川岸その他に築かれる^{やぐら}仮設の櫓から響く佃ばやしの笛や太鼓の音などに接するとき、東京の他のどこへ行っても味えない佃島独特の祭り気分を満喫

佃 島 の 文 化

する。なお島内六か処にはためく五反幟は、たけが長く、幅のせまい布に乳をつけて桿に通したもので、「夕焼けに新富からも見た幟」という川柳を詠んだ人(寿夫)もあるように、対岸の遠方からもよく見える。五反の大幟は寛政10年(1798)6月の本祭に幕府の許可を得て立てたのが最初だというが、白布に黒く住吉大明神の五字を染めぬいた現存最古の幟は明治22年に作られている。広重の「佃島住吉の祭」に描かれた大幟、それは今日に至るまで本祭に欠くことのできない祭りの目じるしである。私は祭りの日、島内をぶらぶら歩いているうちに、ある家の入口に「幟が大きく夕陽をうけて、佃は名残りの江戸祭」と染め出した暖簾^{のれん}の掛けてあるのをみて、佃の人は仲々風流だなあと感心した。

佃の祭りでもう一つ興味のあるのは、前述の大幟を支える角材の杵組である。それは中央に二本、それから左右に約4mずつ離れて各一本の角材(何れも地上約1.3m、幅約0.4m)を立て、その間を上下二段の厚板(長さ約3.5m、幅約0.3m、厚さ約0.1m)二枚を胴差しにして連結する。縦の太い角材を胴差しの厚板が横に貫く仕口は、先細の頑丈な木で楔どめをす

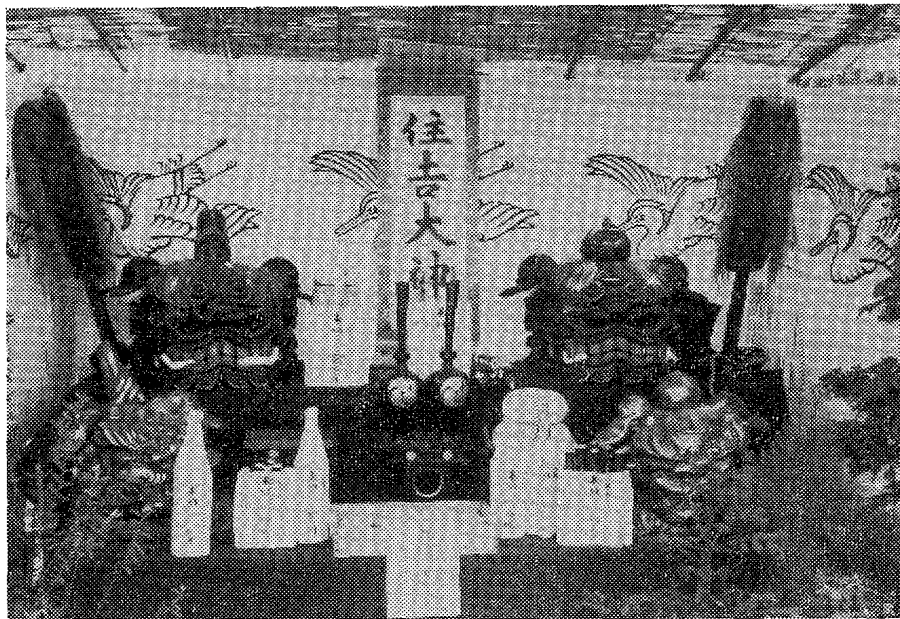


大 幟 を 支 え る 杵 組

る。かくて幟を高く支える桿は、中央二本の太い角材で前後から固く締めつけられ、更に胴差しで結ばれた左右両端の角材によって補強されるのであるから、相当に激しい強風に脅かされても、傾いたり、いわん倒れたりする心配はない。私は祭りの終わった後、この六組の大きな角材がどこに、どのように保管されるのか、を疑問に思い、それを佃のある人に尋ねてみた。その人の説明によると、次の本祭のくるまで、六組のこれらの杵組用材木は佃小橋に近い舟入堀を約2mぐらい掘って、そこに埋め、十分に土をかけて固めておく。そして次の本祭が近ずくと、早めに掘り出し、十分によく土を洗い落し、乾かしてから、再び六か処に組み立てる。しかも杵組を構える場所は毎回一定していて、そこを掘ると柄穴のある礎石が現われるから、そこに角材をはめて直立させ、下に土をかけて固めるのである。私はこの説明を聞いて、この組み立てと取りはずし、更に川底に埋没したり、それを掘り出したりする仕事は仲々時間と労力のかかることに違いないが、これも祭りの日の佃の人々が喜んで奉仕する楽しい作業なのではないかと想像した。先年佃大橋建設工事の折、建設会社銭高組の下請の男が誤ってこの角材の一つにクレーンを引っかけて折ってしまった。そこで佃の人々はいかばかりに怒って、あわや流血の騒ぎになりそうであった。何十年となく使い馴れ、形や色にも独特の味のにじみ出ている用材のことであるから、彼等の激怒するのも無理はない。しかし会社側の出方で漸くおさまり、会社は遠く埼玉県奥の大木を切って材木を作り、それを佃に運んで弁償の約束を果たしたという。

近年、住吉の陰祭は、本祭に比べてはるかに静かで淋しい。佃の旧家七軒の、道路に面した室には獅子頭が一組ずつ安置される。特に金子吉五郎の家にはいわゆる竜虎の頭が飾られ、次のような解説を書いた札が立てられる。「此竜虎の頭は製作年代不詳にして、最も古きものなり、既に天保初年発行の東都歳事記、夏の条に六月廿八日、九日、佃島住吉明神竜虎の頭を渡し云々、とあるのはこれにして、江戸時代佃島は数度の大火災に罹り、

全島焼土と化したることあれど、何時もこの竜虎の頭は不思議にも、その災をまぬかれたり、大正十年頃まで、大祭のとき、此頭を渡せしに、大獅子頭新造以来、之を渡さず、なお大祭のときに此の場所に庭を造り、飾ること吉例なり、佃島住吉講」と。これによってもわかるようにいわゆる獅子頭のうち一組だけは獅子ではなく、竜頭と虎頭で、製作年代は不明であるが東都歳事記の出版された天保9年以前であることは明かである。昔この竜虎の頭の納めてあった蔵が落雷のため、火災を起したとき、竜頭は水を吹き、虎頭は砂を吐いて忽ち火を消してしまったと伝えられている。また他の一組、黒獅子の頭は、あるときその塗りの良否をためすため、洪釜の熱湯の中に漬けられたが、少しも剥げることなく漆黒を保ち、塗りのいかによいかを示したという。



獅 子 頭

以上のように島内処々に獅子頭の飾られる以外に、神楽殿から笛、太鼓の佃ばやしの音が聞えてくること。神社裏門通りに子供相手の露天が少しばかり見られることなどが、いくらか祭りらしい気配を感じさせるに過ぎない。それでも神社では夏祭りの儀を正式に執行する。昭和39年度陰祭り

のときは神社正面右側の太い円柱に「八月六日、大祭式執行、同七日、御神楽祭典式執行」と書いた半紙が張ってあった。そして六日の式には氏子の住む各町会の幹部、氏子総代など12名が拝殿に並べられた折りたたみの椅子に腰をかけ、幣殿右側の詰所で4名の楽人が笛、太鼓、琴、笙を奏するうちに、赤い袍の衣冠をつけた齊主平岡好道をはじめ青または白の狩衣の神官4名が入場、10時から約30分間、神饌、玉串、祝詞、清拔など形の如く儀式を行う。それが終るとまず齊主及び他の神官が退席、続いて参列の十数名も社殿を出て社務所の二階に移動する。これが6日の祭式であるが、その間に一般の参拝者は甚だ少く、嬰兒を抱く母親が4人、男女の児童が5人、老夫婦が一組に過ぎなかった。他方社務所二階では佃島町会長、新佃島町会長、月島連合町会副会長、各町の氏子総代、それに社司と私をむかえて10名ばかりが直会なをらいの酒をくみ交わし、弁松の折詰を味わいながら暫くの間、談笑に時を過した。そして特に話題にのぼったのは近く8月27日に挙行予定の佃大橋開通式に地元の一つとして佃島がどのような祝の催しを企てるべきかということであった。やがて正午になると社司の音頭で一同シャン、シャンと手を締めて散会となった。

(b) 佃ことば

いわゆる佃ことばのような方言は、今これを知る人も少くなり、使う人も稀になったが、以前は佃島っ子の間でかなり久しく慣用されていた。島民の祖先が摂津からの下降者であったためか、多少大阪訛りのことばがあり、たとえば動くをイノク、彼方をアッコという。またここではラ行の口をドと発音して櫓を漕ぐをドをこぐという。強気だをゴイだ、来るをコル、東風をコチ、西風をサニ、北風をナライという。(尤もこれらは佃ことばというよりも江戸地方の舟人の共通語でもあった)。また佃島の古い区割であった下町をシモッチョ、上町をウワッチョ、東町をムケッチョ(向町)と云ったりする。以上は佃の古老から聞いて知ったのであるが、金子為雄の⁽²²⁾

佃島の文化

砂払によれば「深川イケドに佃チイチイ」と云って、深川の漁師はフン、イケドという癖があり、粹な深川一丁目か二丁か、あとはイケドでかっちゃくり」などという文句が流行した。これに対して佃島はチイチ、即ちチッ、チッというのが癖である。イケドにしろチッにしろ、これらは悪罵で、いわゆるフン、チクショウなどと同様であると。今でも細川きみ、飯田きみの両老夫人の如き生粋の佃島っ子は互に佃ことばで話し合うことがあり、オーヨと云って相手の言葉や行動を肯定する。オーヨは「その通りだ」を意味する。佃島ではまた白魚を数えるとき1チョコボ、2チョコボと唱えた。1月17日の白魚祭以前の白魚はベラと呼ばれ、白魚となってからは1チョコボいくらかと計算された。1チョコボは初めは21尾のことで、双六の賽の目の数に相当した。しかし後には20尾を1チョコボというようになった。また雑魚屋(ジャコヤ)ということばは佃煮屋の意味に用いられたことがあり、たとえば佃煮屋丸久の先々代の主人はジャコ勝と呼ばれていた。これは佃煮屋の勝さんのことであった。なお売女を舟マンジュウ、水夫を舟ネズミということもあった。これらの佃ことばは一般に下卑た、品のわるいものとされていたから、佃の人でも仲間では用いても、川向うの江戸の人や、上層階級の人に対しては遠慮して使わなくなり、やがて、いつとはなしに佃ことばも廃止されるようになったのである。

(c) 元日の初詣

毎年元旦には住吉神社で祭式が行われる。その大体の模様は次の通りである。朝9時頃には純白の新しい四手「しで」の垂れる注連縄しめなわを軒に張った神楽殿で、二人の囃し方の男が、寒空の島の隅々までもとどく佃ばやしを鳴り響かせる。この二人のうち老年の方は元来葛西ばやしの名人であり、またそれよりいくらか若い方は、かつて私の視察した白魚祭りのとき、狐の面をかぶって舟のへさきで踊った、見覚えのある人であった。兩人とも東京都内、その他で祭礼のあるとき雇われて、仲間と共に、あちこちに出向くの

だと云っていた。この日使用の大太鼓は住吉神社幣殿のもので、元治2年(1865)作、大正2年修理、昭和27年塗り替えの朱色の逸品である。同じ9時頃、神楽殿のはやしを相図に、先ず佃島漁業組合の人々が十数名参集し、拝殿で清拔をうける。次いで10時過になると浜長、佃伊之、丸長その他十数名の町の顔役連が和、または洋の礼服に威儀を正して参拝、清拔をうけ、祝詞に首をたれて初詣をすませ、すがすがしい気分で退出、互にいつも顔を合せる親しい間柄ではあるが、あらたまって年賀の挨拶を交わす。これらの式が終ると拝殿では萌黄色の短い胴布のついた獅子頭をかぶった男が一人と、笛、太鼓、鉦、などを奏する七人とが一組になって急調子の獅子舞を演ずる。彼らは何れも衿に津久田、背中に津の字を染めたはっぴを着て、いかにもいなせな格好である。一しきり舞い、囃した後、これらの一組は佃の主な家々を巡廻して獅子のほかに狐、ひょっとこ、大黒様などの面をかぶったものも参加して踊り、賑かに笛、鉦、太鼓などで囃したてる。佃島内を一巡すると、彼等は他の町々を流して歩くのである。その間も神楽殿では古風な太鼓、小太鼓の音が新春をことほぎ、晴着姿の老若男女は新しい気持で、次から次へと境内諸社に参拝する。

(d) 盆 踊

佃島の年中行事の一つとして面白いものに盆踊がある。⁽²³⁾ 中央区史下巻によると海村郷土芸能の一つとしての佃島盆踊の起原については確かな文献がなく、詳かでないが、明暦の大火(1657)の後、浜町にあった本願寺が築地に移ることになり、その門徒であった佃島漁民がこれに協力、寺院の工事が成った延宝8年(1680)の盂盆会に盆踊を試み、祖先の霊をなぐさめたのがはじまりであるといわれる。当時は江戸市中を廻って、志を受けてから本願寺に奉納したものを、天保2年(1831)の盆から、それを取りやめ、その後は地元の浜辺、網干場を伝承地と定め、そこで踊るようになった。これは一種の念仏踊で、簡単な踊りを、歌と太鼓の音に調子を合せて

行うのであった。中央区史による以上の如き説明はまず妥当なものであらうが、もう一つ注目すべき記事は⁽²⁴⁾新選東京名所図絵（明治34年）に示されている。「盆踊、むかしは江戸市内にも行はれしが、久しく絶えてなし、唯佃島のみ猶その古風を存し、今に至るまで特許を得て之を行へり。蓋し摂津國佃村より伝へ来りし縁故あるに由る。毎年七月十二日より十六日まで毎夕之を始め十一時を以て終るものとす。甚だめづらしき事なれば、参観するもの亦多し」と。当時は恐らく東京市内で盆踊の公然と行われていたのは佃島だけだったのであらう。また菊地貴一郎の⁽²⁵⁾江戸府内絵本風俗往来では「佃踊は十三日の夜より十五日までは毎夜出づ、是は佃島なる老爺老母十人、さては八、九人一組となり、佃島と書きたる提灯をともし、ヤアトせへ、ヤアトせへと囃しては念仏を節にて唱へて京橋より日本橋の辺を廻る、招く所の門にて称名を唱へ鉦打ならして踊るなり功德の施物若干を受て、又他の招きに応ず、無邪気にして見るに面白かりし」と。菊地はまた「此盆踊は市中他にあることを聞かず、芝久保町に溝口侯の邸亭あり、芝愛宕下に牧野侯屋敷ありて、両侯とも御国は越後なり、又芝増上寺山中にて俗勤めをなすもの越後人八、九分なり、又其他増上寺辺には越後の国より出し人多く、されば七月十四、十五、十六の三夜路上に相集りて盆踊りをなす。最初は一人か二人、酔に乗じ、月下に歌うたふや忽ち三、五人出来りて踊始むるうち十人十五人になり、追々相加り末は三、四十人になり、丸く囲ひて手を揃へ、足を揃へて踊る、其中太鼓を打つあり、酒樽をたたくあり男女相交りて踊りつつ廻る。踊る人々余念なく夜のふくるも知らず、いつ果^{はつ}びやう景色も見へぬ有様なり、其中夜もしらみ、烏の告ぐるに驚きて散会なす、翌夕もまた右の如くなり、この踊は芝大門前并に西久保広小路のみ、外にあることなし」と書いている。この踊の行はれた年代が明記してないので、よくわからないが江戸時代に佃島の人々が日本橋、京橋辺を巡行して行った念仏踊と、芝で行われた一定の場所に男女相交って踊り廻る盆踊とがあって、両者とも市内では珍しいものであった

ことは確かであろう。

佃の盆踊で用いられた歌詞はいくつかあるようであるが、次にその二種を挙げておく。

⁽²⁶⁾
「人も草木も盛りが花よ、コラシヨ、人も草木も盛りが花よ、ヤート
セー、ヨーイトナ、コラシヨ、心しほまず勇んで踊れ（以下囃子、返えし
略）、思い草ならのぼうではやせ、招く芒に^{あかね}気もかるかやと、明日の朝顔宵
から化粧、つぼみや紅葉、咲きや紅ちょこよ、恋に桔梗は色よい仲よ、萩
は寝乱れ錦の床よ、おみなえしで風くねるまで、花のしこ草あ恐ろしや、
善に導け観音草よ、若い芙蓉もおきな草も、秋の野分は無常の風よ、散
れば残らず皆土となる。悟り開けば草木も得度、仏頼れよ南無阿弥陀仏」

⁽²⁷⁾
「踊れ人々、めでたい盆じゃ、五穀みのりて大風もなし、神の恵ぞ、仏
の恩ぞ、恩を思はば信心しやれ、一に一世災難のがれ、二には日夜の気
も柔らぎて、三に三毒消滅するぞ、四には自然と家富み栄え、五には後生
の疑い晴れて、六に六親みな睦まじく、七に七福その身にそなえ、八に八
大地獄へ落ちず、九には九品の浄土へ生れ、十に十方成仏助け、忘れない
でや朝夕共に、信の一句が只肝要で、座臥に唱えよ、南無阿弥陀仏」

以上の秋の七草歌も、数え歌も仏教的行事としての盆踊にふさわしい抹
香くさいものではあるが、特に七草を色っぽく歌い込んだところは仲々面
白い。文政5年版の「浮れ草」には佃踊の歌として⁽²⁸⁾「⁽²⁸⁾またも心の浮かるゝ所
はどこだんべい、八幡の茶屋の^{よねしゆ}娼衆が、するする、てんてんと三味を弾く、
佃島、汐干にすなどる子供のさっても拍子の面白や、あなたの遊びに、こ
なたの遊びに、大きに、大きに浮かりゃがって、熊谷笠着て、ふらり、ふ
らり、くわっとめされた」というのが記載されてあるという。そして盆踊
は京都本願寺の盆踊、チンバ踊を伝えたものとも伝えられている。上述の
如く江戸市中を廻って志をうけつつ踊った時代は、もちろん行列を組むの
であったが、佃島の網干場を伝承地と定めるようになってからは音頭取り
の乗る櫓を中央に立て、その周囲を老若男女の踊り手が巡るという輪踊形

佃島の文化

式の盆踊となったものと思われる。私はこれまで三回佃の盆踊を見学したが、ここでも戦後都内の寺院境内や、町の空地などで盛に行われるようになった盆踊と大差のないものに変じてきた。それでも今尚独特の秋の七草歌などを歌って踊る佃の人々の間には世の無常を悟らせ、仏に帰依する心を求める本来の盆踊の遺風が少しは残っていて、やはり都内では、他に類のない趣きのあるものである。

注

- (1) 有栖川一品宮御用留記（平岡好道蔵）
- (2) 佃島年表，1966. 中央区立京橋図書館発行 p. 38
- (3) 岡本綺堂「白魚物語」綺堂随筆，1956. 青蛙房 p. 149 f
- (4) 斎藤幸雄 江戸名所図会，1834.（天保 5）
- (5) 熈仁親王日記 第4巻，1936. 高松宮蔵版
- (6) 熈仁親王行実，1933. 高松宮蔵版 p. 293
- (7) 「入門者云々」熈仁親王は筆道の師範であられ，高貴の人々の入門者が多かったのに，それが激減したことを意味する。
- (8) 有栖川宮総記，1940. 高松宮蔵版 p. 21
- (9) 同上 p. 1-36. に詳しい年譜がある。
- (10) 佐原六郎「佃島とその社会・文化的変化」慶応義塾大学院社会学研究科紀要 第2号 1963
- (11) 平岡好道 蔵
- (12) 沢村専太郎 日本絵画の研究，1944. 星野書店 p. 520-552
- (13) 京橋区史 上 1937 同区役所編 口絵
- (14) 小野忠重 日本の銅版と石版，1941. 双林社
- (15) 佃島年表（前掲） p. 23
- (16) 工芸，1937. 3月号 小野忠重 泥絵とガラス絵 1954 アソカ書店 p. 106
- (17) 伊東忠太 日本建築の美，1944. 主婦の友社 p. 29
- (18) 伊東忠太（前掲），p. 64-5
- (19) 伊東忠太（前掲），p. 45-6
- (20) かつをぶし，1938. 東京鯉節問屋組合編 水産社 p. 24-28
- (21) 伊東忠太（前掲），p. 74
- (22) 金子太三弥（為雄）砂払，1937. p. 31

- (23) 中央区史 下, 1958. 同区役所編, p. 1344
- (24) 新選東京名所図絵 (1-21), 1896-1911, 風俗画報社編
- (25) 菊地貴一郎 江戸府内風俗往来 上編 巻の五, 1905, 1960 青蛙房選書 9.
p. 137
- (26) 中央区史 下, p. 1344
- (27) 小寺融吉 日本民謡辞典, 1935 壬生書院, p. 175
- (28) 小寺融吉 (前掲) p. 175

(本稿は慶応義塾大学文学部社会学研究室的有志が三島海雲記念財団の研究奨励金をうけて実施中の佃島に関する共同調査研究の結果の一部についての中間報告である。この調査に対し、常に好意ある援助を惜まれない佃島の小沢長吉、飯田栄太郎、小林吉太郎、高橋金三郎の諸氏に対し、また特に資料の点検その他について便宜を与えられた住吉神社の平岡好道氏に対し、深く感謝の意を表する。

1967.11.30)

佃 島 関 係 資 料 目 録 (試 作)

(M—明治. T—大正. S—昭和)

A. 古文書. 記録. 日記

(1) 金子為雄蔵—佃島記録. 佃島由緒書. 佃島沽券図 (宝永 7).

飯田栄太郎蔵—佃島年代記 (原本無題)

細川一郎蔵—佃島絵図 (宝永 7)

小沢長吉蔵—佃島之古事記

(2) 平岡好道蔵—平沢五介撰 佃島碑文并和解 (寛政 2) 佃島住吉祠碑拓本 (寛政 3). 御糺書 (文政 2). 大江戸住吉神社略縁起 (天保 3). 佃島住吉御社再建仕法書 (天保 6). 菱垣廻船問屋奉納物控 (天保10). 竜王弁財天勧請. 同白木屋奉納物控 (天保10). 諸国廻船御礼賦与問屋調印続記. 船印廻船留記. 廻文控 (嘉永 5. 安政 4. その他). 佃島住吉神社境内絵図 (文久3). 住吉神社御社日記. (M1—M4). 神社関係諸届 (M 1—M36). 水屋御届之控 (M 2). 佃島住吉神社明細帳 (M 3). 本居豊顕 住吉社頭植樹之碑拓本 (M 8). 築地別院上地に対し下附願指令書 (写本 M 9). 氏子総代者一覧 (M12—M36). 佃町正遷宮次第 (天保10). 佃町住吉神社に関する願書 (M 9) 同廃社願 (M 30). 深川佃町住吉神社々殿改築工事竣成ニ付登録書. (S 3). 有栖川一品宮御用留記 (M 5—M 17). 平岡好国書 佃島白魚沿革誌.

(3) 蔵者不明—森家由緒書.

文部省蔵—桜木庄五郎旧蔵古文書類 (写本)

(4) 慶大図書館蔵—佃島記録 (写本)

慶大社会学研究室蔵—摂州西成郡佃村見市家文書 四冊三舗

(5) 京橋図書館蔵—佃島大工忠三郎 判取帳 (文化11—文政 5). 佃島大嶋屋忠兵衛 船床証文帳 (文政11). 佃島家主善右衛門地所訴訟文書控 (嘉永 5). 佃島加藤家故紙帖込帳. 七番組佃島戸籍 (M 2). 佃島水谷金蔵 万覚帳 (M 9—M11). 佃島水谷金蔵 船舶登記書綴 (M19—M25).

B. 地方誌. 年表. 記念誌

(1) 東京市史稿 市街篇 第50 明治期 (S36). 同港湾篇 第 1 (T13). 京橋区史上下 (S12—17). 中央区史上中下 (S33). 深川区史上下 (T15). 品川町史 (S 7). 京橋月島新聞社編 月島発展史 (S15). 江東区史 (S32). 東京港史 (S37).

(2) 中央区京橋図書館所蔵 郷土資料目録. 京橋図書館編 (S38). 中央区政年鑑 (S34—S40). 中央区年表. 明治文化篇 (S 41) 佃島年表. 京橋図書館篇 (S41).

(3) かつをぶし 東京鯉節問屋組合 (S13). 砂糖貿易同業組合沿革史 (S13).

石井鉄工所三十五年史 (S31). 東京電灯株式会社史 (S31). 三井倉庫五十年史 (S31). 白木屋三百年史 (S32). 月島機械株式会社五十年史 (S32). 創立五十周年記念誌 中央区立月島第一小学校 (S32). 石川島重工業株式会社108年史 (S36). 吉村武夫 ふとん綿の歴史 ふとん綿歴史研究会 (S41).

C. 水産, 漁業

- (1) 羽原又吉 日本漁業經濟史 中巻の2 (S29) 野村豊 近世大阪の漁村, 藤岡謙二郎篇畿内歴史地理研究 第8章 (S33).
- (2) 川井新之助 日本橋魚市場沿革紀要 (M22). 日本橋魚河岸記念碑拓本 久保田万太郎撰文. 豊道慶中書 (S29). 佐久間仙一郎編 水神祭 (S31). 田口達三 魚河岸盛衰記 (S37). 山口米蔵 記憶に残る魚河岸模様. (). 佃煮のしおり 水産庁 (). 水産年鑑 水産社 (S41).

D. 宗教, 文芸, 芸能

- (1) 住吉神代記 (天平 3. 写真版巻物写本, S10) 副島知一編 住吉大神御鎮座地. (S2). 梅園惟朝編 住吉松葉大記 (S9). 平岡好文 典故考証雜式典範 (S13. 増補版 S36). 幟仁親王行実 高松宮蔵版 (S8). 有栖川宮総記 高松宮蔵版 (S15). 総裁有栖川宮幟仁親王五十年祭記念 御遺墨御遺品展覧目録 皇典講究所 (S13). 藤音得忍編 築地別院史 (S12).
- (2) 浅井了意 江戸名所記 (寛文 2. 江戸叢書巻の2. T5). 増補江戸咄 (元禄 7. 近世文芸叢書巻の1). . 菊岡沽淳 江戸砂子附続江戸砂子 (享保 17). 江戸砂子補正. 加賀美遠懷 新燕石十種 巻の2 (M45). 再校江戸砂子 (S9). 江戸名物鹿子 (享保18). 狂歌入絵本隅田川岸一覽 (享和 1). 敬順十方庵遊歴雜記第5編. 巻の中 (文政 7. 江戸叢書巻の3. 巻の7. T5). 川崎重恭 春の紅葉 (文政12. 江戸叢書巻の8. T6). 斎藤幸成 東都歳事記 巻の3. 夏の部 (天保 9). 斎藤幸成編 江戸名所図会三冊 (天保年間. 大日本名所図会刊行会. 4巻. T8). 狂歌江戸名所図会 (嘉永 3).
- (3) 今井卯木 川柳江戸砂子 (M45). 西原柳雨 川柳風俗志 (S4). 西原柳雨 川柳江戸名物 (T15). 阿達義雄 江戸川柳の史的研究 (S42).
- (4) 服部誠一 東京繁昌記 (M7). 岡三慶 今昔較 (M7). 菊地貴一郎 絵本風俗往来 (M38). 柏崎具元 事蹟合考 (M40. 燕石十種巻の1), 望海毎談 (M41 燕石十種巻の3). 菅園 空おぼえ (M45. 新燕石十種巻の1). 矢田挿雲 江戸から東京へ (T9). 永井荷風 築地草 (). 三田村鳶魚 鳶魚随筆 (T14). 金子太三弥 砂払 (S8). 鐺木清方 築地川 (S11). 岡本綺堂 江戸についての話 (岩井良衛篇 S30). 岡本綺堂 白魚物語 (綺堂随筆 青蛙房 S31). 木村莊八

佃 島 の 文 化

東京繁昌記 (S33). 野田宇太郎 東京文学散歩 (S35). 豊島寛彰 隅田川とその
兩岸 上巻 (S36). 佃ばやし研究資料 中央区立月島第一中学校 (S37)

(5) 田村成義作 古河新水脚色 古河黙阿弥補筆 安政奇聞佃夜嵐 (M25 頃). 市
川左団次 左団次芸談 (S11). 小野田勇 つくだ住吉亭 (S39). 北条秀司 佃の
渡し (S40).

E. 雑誌その他

(1) 佃島を語る. 金子政吉氏の談話筆記 今昔2巻2号 (S6.6). 平岡好道 佃
島の今昔 とうきょう広報 (S41.2)

(2) 椿実 住吉神代記の神観念 宗教研究 第152号 (S32.10). 佐々木陽一郎
近世における葛西漁業の発達 史海 第5号 (S33.3). 曾根研三 中世住吉大社の
信仰動態 神道宗教 第28号 (S37.11). 野田宇太郎 隅田川挽歌 文学散歩18号
(S38.7). 佐原六郎 佃島とその社会・文化的変化 慶大大学院社会学研究科紀要
第2号 (S38). 佐原六郎 古文書から見た佃島の起原. 金高克己 佃島近辺. 佐野
和子 佃島明治二年戸籍の分析. 萩原竜夫 佃島民俗一斑 以上 東京の歴史 第
4号 (S40.9). 史料校刊 佃島年代記(1)(2) 東京の歴史 第4号 (S41) 第5号
(S42). 中井信彦 明治二年戸籍からみた佃島の住民構成 米山桂三博士還暦記念
論文集 日本社会と近代化 (S42).

F. 新聞その他

佃島の子供たち アサヒグラフ (S35.8.21号). 佃島 ロベール・ギラン 朝日夕
刊 (S36.1.22). 親分発行の代用一銭 朝日 (S36.8.26). 明石側渡船移転 東京
民友新聞 (S36.8.17). 都心と江東結ぶ新道路 朝日 (S36.10.19). 面目一新の明
石町 東京民友 (S36.11.5). 白魚 毎日夕刊 (S37.2.12). 佃島 戸板康二 ガスニ
ュース (S37.4.5). 佃の渡し 毎日 (S37.8.11). 佃新橋 毎日 (S38.6.25). 日
本最大の橋ゲタ 朝日 (S38.6.25). クレーンでつり上げ 佃新橋 毎日 (S38.6.
25). 佃新橋で都庁汚職 毎日夕刊 (S38.8.25). 佃島渡船場 毎日夕刊 (S38.
9.3). あと半年の船長さん 読売 (S38.12.16). 佃の渡し名古屋に身売り話 毎日
(S39.8.27). 来るものゆくもの 朝日夕刊 (S39.8.27). 佃大橋と渡し 毎日夕
刊 (S39.8.27). 新人国記(787) 佃島 朝日夕刊 (S39.12.16). 隅田川(6) 佃島
争う当用漢字派と伝統派 朝日 (40.1). 隅田川(25) 江戸無宿 朝日 (S40.
2.8). 隅田川(28) 北斎と広重 朝日 (S40.2.11) 東京人 わが町 東京新聞
(S40.6.27). 消えゆく 江戸情趣 毎日夕刊 (S40.10.7). 江戸っ子 きっすい
朝日 (S41.1.6). 小島政二郎 明治の人間(7) 朝日 (S40.1.10). 佃の町名残す
朝日 (S41.7). 佃のなげき 朝日 (S41.8.4). 川柳句碑建立 中央区民新聞 (S41.
11.21). いこい 毎日 (S42.6.25).